

第2章 実践的研究の具体的な進め方

第1節 授業研究

I 授業研究の意義

教師の指導力の向上を図る

子供一人一人が、自ら学ぶ喜びを味わい、楽しく主体的に活動できる授業の実現に向け、教師は、日々学習指導の改善・充実に努力することが大切である。

授業研究の意義として、次のようなことが挙げられる。

一つは、授業改善の方策を導き出し、学年・学級経営、教科経営の改善・充実を図ることである。

もう一つは、教師が子供一人一人の成長への願いをもって、自分自身の授業や他の教師の授業を対象に研究することにより、授業改善を図り、授業設計・実施・評価についての力量を身に付けていくことである。

このように授業研究は、教師の進める研究において、重要な役割をもっている。

II 授業研究の手順

本書では、仮説を立て検証する場合の研究方法を基本に述べる。授業研究は、図1の手順を踏んで進められる。

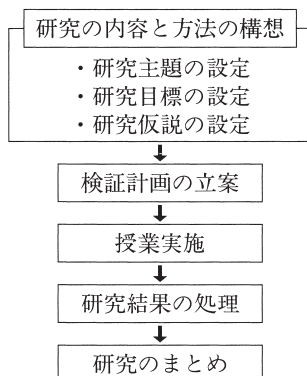


図1 授業研究の手順

1 研究の内容と方法の構想

研究の特徴を生み出す

研究の内容と方法の構想とは、子供の実態と各教科等の目標に基づいて、目指す子供を設定し、その実現のために、目指す子供像、育てる場、手だてなどを考えることである。その際、子供の立場に立って考えることが大切である。この構想を十分に練っていくことにより、研究者の子供の成長への願いが明確になり、研究の特徴が生まれてくる。

図2は、研究の内容と方法の構想の手順を示したものである。

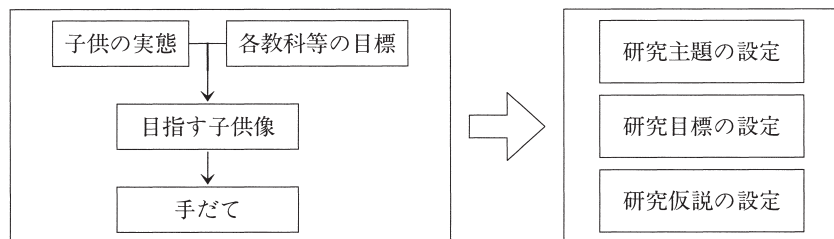


図2 研究の内容と方法の構想の手順

(1) 各教科等の目指す子供の設定

子供の成長への願いの明確化

最初に構想しなくてはならないものは、各教科等で、どのような資質や能力を育成するのかという、目指す子供である。一般的には各教科等で研究を進める場合、目指す子供は図3のように、子供の実態と研究対象の分野・領域の目標から設定するのである。

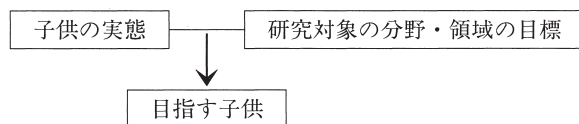


図3 目指す子供像の設定

次に、研究者として目指す子供をどのようにとらえているか明確にするために、目指す子供像を描く。目指す子供像とは、研究対象の分野・領域の目標に基づき育成できる資質や能力を分析し、その資質や能力を身に付けた子供はどのような子供であるか、研究者の考えを具体化したものである。

このことについて、小学校社会科３・４年：研究主題「地域社会の一員としての自覚を促す社会科指導の工夫—出会いの活動を取り入れて—」（p.159 実践例１）での目指す子供「地域社会の一員としての自覚をもつ子供」を例にして述べる。

地域学習を中心にした小学校３・４年の社会科学学習において、子供たちの地域に対する思いや願い、地域学習を進めていく上での子供のよきなどの実態をアンケート法や観察法等でとらえた。すると「もっと住みよい町にしたい」「自然を大事にしたい」「地域をきれいにしたい」などの思いや願いをもっていることや、見学などの体験的な学習で、進んで疑問に感じたことを解決していこうとする態度が身に付いていることが分かった。地域学習を中心とした小学校３・４年の社会科学学習において、学習指導要領では、「地域社会の一員としての自覚をもつようにする」が目標(1)に挙げられている。このことから、子供たちの地域に対する思いや願い、学習を進める上での実態と目標とを踏まえて目指す子供を設定した。

次に、「地域社会の一員としての自覚をもつ子供」について、研究者としてのとらえ方を具体的にすることがある。そこで「地域社会の一員としての自覚をもつ子供」とは、『自分たちが住んでいる地域社会の構成員として、よりよい地域社会を目指して地域の人々と共に生きていこうとする子供』であるにとらえ、問題解決的な学習を通して、段階を踏んで育成していくことができると考えた。その段階とは、図４のように、「地域の人々と心のつながりをもつことができる子供」「人の生き方に地域社会とのつながりを感じることができる子供」「自分がどんな努力や工夫をすれば地域社会の課題を克服し、よりよい地域社会が実現できるのか考え、生活の改善点を見いだすことができる子供」「自分たちが考えた生活上の改善が、よりよい地域社会づくりにつながることに確信をもって、地域社会へ参画しようとすることができる子供」である。

このような考えを基に、目指す子供を「地域社会の一員としての自覚をもつ子供」として設定したのである。

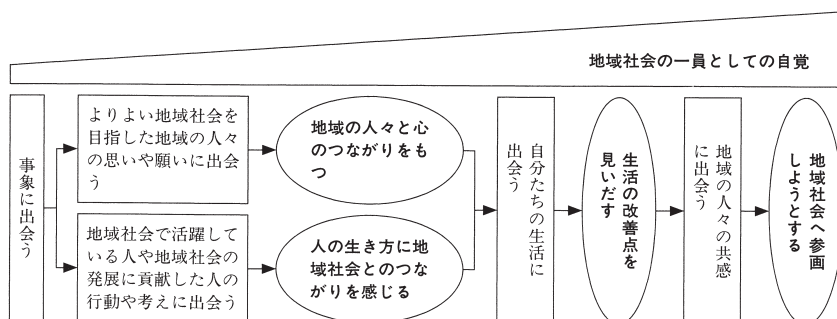


図４ 研究の基本構想図

(2) 手だての構想

手だての構想は、学習指導の改善に関する授業研究の中核になるものであり、研究の特徴を表すものでもある。よって、研究の手だての構想においては次のようなことが大切である。

ア 目指す子供にかかわる実態把握

様々な方法での実態把握

研究を進める上で、実態把握は、欠かすことのできないことである。なぜならば、授業研究は、実態把握でとらえた子供の姿を、手だての投入によって目指す子供に育成できるであろうという仮説をもって進めるからである。

この実態把握は、各教科等の分野・領域で育成したい資質や能力からとらえていきたい。

実態把握を行うに当たっては、これまでに目指す子供にかかわる資質や能力がどのように身に付いているかの視点が大切である。方法として、教師の観察が中心に行われることが多く見られるが、アンケート法、テスト法や面接法などを組み合わせる必要がある。

例えば、目指す子供の「態度面」から実態把握を行う場合、「指示待ちが多く、自分から取り組めない」「おしゃべりが多く、集中して取り組めない」などと現象のみで判断することが多く見られる。「なぜ、指示がなくては動けないのか」、「なぜ、集中できないのか」などの要因をアンケート法や面接法などからとらえないと、有効な手だてが講じられない。

イ 実態把握に基づく指導方法の具体化

子供の実態から指導の在り方をとらえ直す

教師の間で「うちの学級は積極的に発表する子供が少なくて困る」「しっかり前を向いて私の話を聞いてくれない子供が多くて困る」などの話を耳にすることがある。とかく、子供に原因があると思いがちだが、この事実を教師の指導の在り方から、とらえ直してみるこそが必要である。

例えば、「積極的に発表しないのは、教師の発問構成が悪く、理解できていないのかもしれない」とか、「子供が自分で考えて答えを出そうとしてい

たのに、じっくり考える時間や場を用意していなかったのではないか」などと振り返ってみるのである。

このように、目指す子供に対する実態把握と実態把握に基づく指導の在り方をとらえ直すことにより手だてを構想するのである。

構想した手だてについて、前述した小学校社会科3・4年の実践例の手だてに当たる出会いの活動を例として示す。

この研究では、子供の興味・関心を持続できるようにするために、問題解決的な学習を取り入れて、直接地域の諸事象や地域の人々と繰り返しかわる出会いの活動が有効であると考えた。

この出会いの活動を通して、地域の人々の思いや願い、努力や工夫などを自ら具体的にとらえることができ、地域の人々の生き方を学ぶことができる。さらに、実際に見学したり、直接話を聞いたりすることで、地域や地域の人を身近に感じ、自分も地域の人々とともに地域社会をつくり上げていける存在であることを自覚することができる。図5は、構想した手だてを示したものである。(p.162参照)

出会いの活動	出会いの対象	自覚に迫る姿
身近な地域のよさや課題についてグループや学級で調べ、同じ地域で暮らす人々が思っていること、悩んでいること、これから必要なことを話し合う	よりよい地域社会を目指した地域の人々の思いや願い	地域の人々と心のつながりをもつ
地域社会で活躍している人や、過去に地域社会の発展に貢献した人の研究者などに会って話を聞き、先人の営みや当時の人々の生活などについて話し合う	地域社会で活躍している人や地域社会の発展に貢献した人の行動や考え	人の生き方に地域社会とのつながりを感じる
よりよい地域社会づくりという観点から、地域の人々の願いの実現について話し合い、自分でもできそうなことを考える	自分たちの生活	生活の改善点を見いだす
グループや学級全体で考えた提案を発表して、地域の人や学習でかわった人たちから意見や感想を聞き、地域の人々の期待について考える	地域の人々の共感	地域社会へ参画しようとする

図5 構想した手だて

(3) 研究主題の設定

資質や能力と手だての明確化

研究主題を設定することは、研究者が、目指す子供の実現に向けて各教科等で育成しようとする資質や能力を、どのような手だてで身に付けていけるようにするのかを明確に示すことである。

前述した小学校社会科3・4年の実践例では、研究主題を、次のように表現している。

— 研究主題 —

地域社会の一員としての自覚を促す社会科指導の工夫
— 出会いの活動を取り入れて —

- 目的 地域社会の一員としての自覚をもつことができる子供の育成
- 内容 社会科の指導方法の工夫
- 方法 出会いの活動

(4) 研究目標の設定

目指す子供に迫る
観点を示す

研究目標は、研究対象において、育成したい資質や能力が身に付くように、手だての有効性を検証することを明示したものである。言い換えると、研究の具体的方向性や目的（目指す子供）に迫る観点を示すものである。したがって、研究目標を設定することにより、目指す子供の実現に向けた、手だてや検証計画がより具体的なものになる。

研究目標の具体例を前述した、小学校社会科3・4年の実践例で示すと次のようである。

— 研究目標 —

地域社会の一員としての自覚をもつ子供を育成するために、身近な社会的

①

事象を対象にした指導において、問題解決的な学習の過程に出会いの活動を

②

③

取り入れたことの有効性を明らかにする。

① 目指す子供

② 対象の分野・領域

③ 手だて

(5) 研究仮説の設定

手だての投入場面
や内容の具体化

研究仮説の設定とは、各教科等で目指す子供の実現に向け、手だての投入場面や内容などを具体化し、見通しをもつことである。

研究仮説を設定することには、次のような意義がある。

- 手だてをどのような場面で、どのように投入することにより、どのような子供の変容を期待するのか具体化することで、研究の特徴を明確にすることができる
 - 手だての構想により、授業実践を具体化する方向が明らかにでき、検証のための授業実践の構想が確かなものとなる
 - 手だての構想により、検証計画の立案において、検証の観点、場面・方法を明確にすることができる
- また、設定する際には、次のことに留意する必要がある。
- 身に付けさせたい資質や能力を構造化し、投入する手だての組立てを考える
 - どのような内容を、どの場に、どのように投入すると、どのような変容が期待できるのかを具体化し、分かりやすく表現する
- 一般的には、次のように表現される。

「○○において、○○することによって、○○になるであろう。」

(場の限定)

(手だて)

(変容への願い・目指す子供像)

次に示すのは、小学校国語科 (p.166実践例 2) の研究主題と研究仮説である。

— 研究主題 —

喜んで書く子を育てる書くことの指導

— 取材、構想過程に「まんがシート」を取り入れて —

— 研究仮説 —

- 1 取材の過程で、印象に残った場面を「まんがシート」に書き留める活動を取り入れれば、材料を集める楽しさを感じながら伝えたいことの中心を焦点化することができるであろう。
- 2 構想の過程で、書き留めた「まんがシート」の順序を入れ替えて文を組み立てる活動を取り入れれば、場面を組み立てて構成するおもしろさを感じながら段落と段落の続き方を工夫した文章構成を考えられるであろう。

2 検証計画の立案

場面・観点・方法を
計画

検証は、研究仮説が有効であるかどうかを判断するために行うものである。授業研究においては、授業実践を通して検証が行われる。したがって、検証は、授業実践において、計画的・効果的に行われるよう研究で明らかにしたい事柄を、どのような場面において、どのような観点から、どのような方法で検証するのかを計画的に行う必要がある。

検証計画を立案するに当たっては、次のような手順を踏むことが大切である。

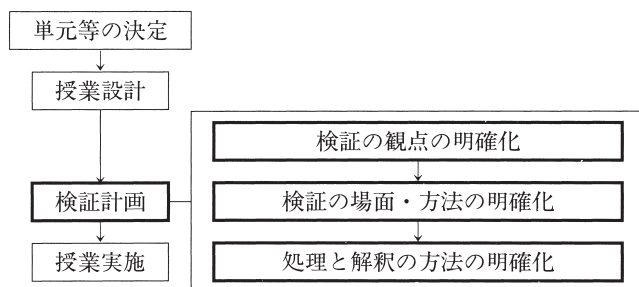


図6 検証計画の立案の手順

(1) 検証の観点の明確化

検証の観点の明確化とは、研究仮説で明らかにしたい事柄を、授業実践の単元等のレベルに具体化した授業仮説（p.78参照）にすることである。

授業研究における検証は、手だてによって得られた子供の変容をとらえることである。子供の変容をとらえる観点は、関心・意欲・態度、思考・判断、技能・表現、知識・理解などの資質や能力である。

(2) 検証の場面・方法の明確化

検証の場面・方法の明確化とは、研究仮説が、授業実践のどの過程のどのような場面に位置付くのか具体化し、どのような方法を用いて検証するかということを明らかにすることである。このことによって、検証計画をより明確にし、見通しをもって研究を進めていくことができる。

次に、それぞれの観点ごとに、検証の視点と方法について述べる。

ア 関心・意欲・態度の検証の視点と方法

(ア) 検証の視点

研究主題は「学ぶ意欲を高める学習指導の在り方に関する研究」といった意欲や態度に視点を当てたものが多い。しかし、それらの研究結果の処理においては、学ぶ意欲が高まったかどうかを確かめていないものがある。それは、学ぶ意欲が高まったときの子供の姿を十分に具体化していないことに起因していることが多い。

すなわち、このような情意面の変容を検証する場合、学ぶ意欲や主体的な態度などが身に付いた状況子供の具体的な姿として想定し、質問項目やチェック項目を設定して、調査や観察が行われなければならないことを示している。

(イ) 検証の方法

関心・意欲・態度をとらえる方法としては、評定尺度法なども加味した質問紙調査法や、チェックリストを用いた観察法などを採用するが多い。

次に、このような検証を行う場合、留意すべき主な点を挙げる。

- 学習活動の流れに沿って、関心・意欲・態度の現れをとらえる
- 学習の導入では対象へのかかわり、展開では意欲的な追究活動、終末では自己発見につながる態度というように、学習の過程に即して評価の観点を明確にしておく
- 発言や挙手の回数のように数量的な面だけでなく、一人一人の質的な面の変化を読み取るようにする。そのためには、自己評価を取り入れ、その子供なりのよさをとらえる
- 一時的な変化ではなく、長期にわたって観察し、過去の学習状況との比較や恒常的な現れに着目してとらえる

関心・意欲・態度を考察する場合には、調査の選択項目ごとにその選択人数を集計して、表やグラフに表し、その変容の状況をとらえてみる必要もある。抽出児の変容を知るためには、抽出児それぞれのプロフィールなどを作

成して考えることも必要である。

イ 思考力・判断力の検証の視点と方法

（ア）検証の視点

思考力・判断力については、学習の過程に沿うという視点が必要である。

次に、科学的思考を学習過程に沿ってとらえた場合の要素を例に挙げる。

○問題を見いだす能力 ○比較・関係付ける能力

○規則性・仕組みをとらえる能力

さらに、それらの要素に即して具体化すると次のような項目が例として挙げられる。

○問題意識 ○予想 ○比較 ○推論 ○推理 ○仮説・モデル

○規則性の発見

思考力・判断力が培われる姿は、一人一人に違いがある。

また、思考力・判断力については、目標として規定されている方向への向上が見られるかどうかを評価するのであるから、当然、一人一人に視点を当て、子供のそれぞれがいかなる判断の下で問題を追究したり、思考活動を行ったりしたかを具体的にとらえ、検証しなければならない。

思考力・判断力を検証するに当たっては、日ごろから上で述べたような要素・項目の観点から、子供をよく観察し、言動の考察やノートの分析などを通して、総合的に検証していくことが大切である。

（イ）検証の方法

思考力・判断力を検証する場合の代表的な方法として、観察法、作品法、論文体テスト、問題解決テスト等が挙げられる。日常生活の中で、子供たちがどのような問題を発掘し、追究しているか、どのような問題に気づき、自主的に追究活動に取り組んでいるか、問題事項を様々な角度から考えているか、他の人の考えや見方を取り入れ、自分の考え方を見直し修正しているかなどを的確にとらえておくことにより、それぞれの方法が効果的なものになっていく。

また、自己評価を取り入れるなど、一人一人の子供の内面にまで目を向け

て十分な検証をしていきたい。

ウ 技能・表現の検証の視点と方法

ア 検証の視点

技能・表現は、思考・判断したことを基に、表現したり行動したりする手段及びその技能ととらえることができる。具体的には、話す・聞く・書く・読む技能、計算技能、図表・資料等を読み取る技能、実験・観察技能、歌唱・演奏技能、描図技能、道具使用技能、運動技能などがある。

技能・表現を検証する視点は、多種多様なものがあり、各教科の特性にも直接かかわってくるので、一概に視点の当て方を論じることとはできない。技能・表現の内容によって、個別に視点を設定することが必要である。

イ 検証の方法

目標に即して、観察の要点あるいは評価の観点及び評価の規準を明確にもち、各教科の特性や内容を踏まえた具体的な基準を設けて検証する。作業場面や実験・観察場面、作品の成果、発表場面、レポート作成場面など、それぞれの場で一人一人の状態をとらえる方法がある。子供主体ということを考えると、自己評価や相互評価を活用することが大切である。

エ 知識・理解の検証の視点と方法

ア 検証の視点

知識・理解の関係は、図7のようになっている。すなわち知識は理解と記憶の融合体である。しかし、知識の中には、記憶面の強いもの（読字、書き順、 $a \times b$ を ab と書くなど）と、理解面の強いもの（学習事項の意味、意義、相関関係など）がある。また、理解には、広さと深さがあり、記憶にも広さと確かさなどが考えられる。

学力には知識・能力・態度という側面がある。新たな課題の解決を目指して考えたり、判断したりすることに

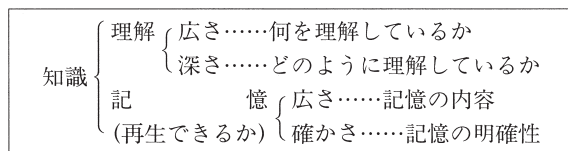


図7 知識・理解・記憶の関係

役立つように、内容などについて一人一人がどのように理解しているかが大切なのである。画一的な知識の量をとらえるようであってはならない。

(イ) 検証の方法

検証の方法は、客観テストのほかに、観察法が主なものとして挙げられる。ほかには、問答法、レポート法などがある。ここでは、知識・理解の結果のみをとらえるのではなく、理解の仕方や方法、深さなどもとらえることが大切である。

(3) 処理と解釈の方法の明確化

処理と解釈の方法の明確化とは、観察や録画と逐語記録等で得られた資料を、表にまとめたりして処理を行うなど検証の観点から分析し考察する方法を明らかにすることである。

小学校社会科4年：単元「多々良の大地をひらく」の授業実践における検証計画の例を示す。

表1 検証計画（例）

研究仮説	検証の観点	検証の方法	処理と解釈
よりよい地域社会を目指した地域の人々の思いや願いに出会う活動を行えば、地域の人々は自分と共通する生活上の思いや願いをもっていることに気付き、心のつながりをもつだろう。	多々良沼や松林一帯のよさや課題について調べ、その地域のよりよい活用を目指した地域の人々の思いや願いに出会う活動を行ったことは、地域の人々と心のつながりをもつのに有効であったか。	学習活動の観察 ノートやワークシートの内容分析	手だての投入時における抽出児の観察記録と抽出児の学習ノートを基に分析する。

3 授業設計

(1) 授業設計の意義

子供の側に立った
授業の展開

授業設計とは、子供の実態に基づいて、単元の日標・評価規準を設定し、設定された目標を子供が達成できるように、学習過程・教材・活動・評価方法などを選択し、順序付ける

とともに、授業展開の状況を試行・修正しながら指導案として作成することである。さらに、作成した指導案を基に教材・教具などの授業の諸準備を行うことである。

このように授業設計を考えることにより、設計・実施・評価のサイクルとして授業をとらえることができ、より科学的な実践を行うことができる。そして、教師の授業設計力を高めていくとともに、子供の変容を踏まえながら授業実践を行うことで、子供の側に立った授業を展開することができるようになる。

学習指導では、一つの単位において、関心・意欲・態度、思考・判断、技能・表現、知識・理解等の資質や能力の育成を目指すので、授業設計を行う場合、単元レベルの授業設計を基本とすることが大切である。

次に、教科における単元レベルの授業設計を基に、授業設計の流れや具体的な方法、その留意点について述べる。

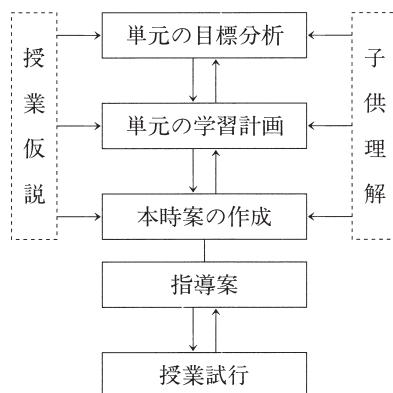


図8 授業設計の流れ

(2) 子供理解

子供のよさや可能性を感じ取る姿勢

授業設計を考えるには、常に子供理解を基盤とすることが大切である。なぜなら、学習の主体は子供であり、学習指導は、子供一人一人を深く理解し、学習活動を支援することにあるからである。

子供理解のためには、まず子供一人一人に対する愛情ある共感的な期待を含めて、そのよさや可能性などを感じ取るようにすることを基本に踏まえることが必要である。また、子供の思考や判断、表現などを、その子のよさとしてとらえる姿勢をもつことが大切である。

また、子供理解を深めるためには、各教科においては、四つの「観点別学習状況」の「評価の観点」から設定された「評価規準」に照らして、その目標や内容の実現状況を把握することが必要である。さらに、子供一人一人の興味・関心、意欲、好み、考え方、様々な能力、理解の仕方などについて、例えば、学習過程に視点を当てるなどして子供の実態を把握する必要がある。

次に、学習の流れに沿ってよさをとらえる場合の観点を例示する。

① 自ら課題を見付け、取り組もうとするよさ

自分なりの思いや願い、疑問をもって課題を見付け、課題解決に向けて自主的、主体的に取り組もうとする意欲や態度

② 課題解決に向けてのよさ

自ら目標をもち、課題解決に向けて、何を、どのように、何のためにやりたいのかという思いや願い

③ 課題解決に生きて働くよさ

課題解決に生きて働くその子なりの思考のパターンや判断の基準、表現力、知識や技能など

④ 身に付けた力を進んで生かそうとするよさ

新たな課題を解決する中で進んで生かしていこうとする意欲や態度

以上のようなよさを、日常の実践を通して次の方法でとらえることができる。

ア 授業前

(ア) 他の授業時間における様子（観察）

(イ) 休み時間等における様子（観察）

(ウ) 家庭等での様子（アンケートなど）

(エ) 興味・関心、既有的知識や経験（アンケートなど）

イ 授業中

- (ア) 取組の様子（観察）
- (イ) 発言やつぶやき（観察）
- (ウ) ノートや作品等（観察）

ウ 授業後

- (ア) ノートや作品等の分析
- (イ) 自己評価・他者評価（アンケートなど）
- (ウ) 質問等

(3) 単元の目標分析と評価規準の設定

ア 単元の目標分析の意義

目標相互の構造の 明確化

単元の目標分析とは、学校の教育目標や学年目標、教科目標を踏まえ、子供の経験、地域社会や家庭の実態などを考慮した上で、資質や能力としての目標を、単元レベルにおいて精選し構造化することである。

単元の目標分析を行うことにより、単元における基礎目標、中核目標、発展目標、前提目標と、その目標相互の構造を明確にすることができる（p.71 参照）。さらに、単元で育成したい資質や能力についての評価規準をはっきりさせることができるので、どのような活動を学習過程のどこに位置付けるかなど、育成したい能力等を形成過程として目標に位置付けることができる。

イ 単元の目標分析の観点

四つの観点から基 礎・基本を分析

単元の目標分析を行う場合、その単元において獲得されるべき基礎・基本の洗い出しが必要である。これまでの教育においては、基礎・基本として、知識や技能を中心にとらえる傾向が見られたが、これからの教育は、生きる力として育成する資質や能力を基礎・基本としてとらえることが肝要である。

このように基礎・基本をとらえたとき、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」などの資質や能力がその中核になるといえる。そこで、基礎・基本を次のような四つの観点から分析する必要がある。

○ 関心・意欲・態度

その単元で育成しようとする関心・意欲・態度に関する目標で、学習することへの関心をもち、親しみをもって進んで学ぼうとしたり、日常生活に活かそうとしたりするなど、その方向に向かっての高まりや深まりが期待される向上目標や体験目標などが主なものである。

○ 思考・判断

その単元での課題や問題発見、比較、関連、結果の考察、処理など問題解決過程における子供の思考操作などで、筋道を立てて考えたり、分析的、総合的に判断して課題を解決したりすることに関する向上目標や体験目標である。

○ 技能・表現

考え、判断したことを基にして、その単元で学習する操作や手続き等の身に付けるべき表現、行動などの技能としての目標で、目的に応じて発揮したり習熟したりすべき達成目標である。

○ 知識・理解

その単元での基礎的概念に関する目標で、相互の関係、規則性、性質など

表2 目標分析表(例) (p.188実践例5参照)

学習事項	関心・意欲・態度	数学的な考え方	表現・処理	知識・理解
事象の中から x と y の関数が $y=ax^2$ で表されるものを見つけ出す。	事象の中から伴って変わる二つの数量を見つけだそうとしている。	関数 $y=ax^2$ を他の関数と区別することができる。	事象の中から伴って変わる二つの数量を見つけだすことができる。	関数 $y=ax^2$ は二次関数の特別な場合であることが分かる。
関数 $y=ax^2$ のグラフをかき、その特徴を調べる。	関数 $y=ax^2$ のグラフをかき、その特徴を調べようとしている。	一次関数との比較で、関数 $y=ax^2$ のグラフの特徴をとらえることができる。	x と y の対応表を基に、関数 $y=ax^2$ のグラフをかくことができる。	関数 $y=ax^2$ のグラフの特徴を理解している。
関数 $y=ax^2$ の値の変化のようすを調べる。	関数 $y=ax^2$ の値の変化のようすをグラフを通して調べようとしている。	一次関数の場合と比べて、変化のようすをとらえることができる。	グラフから変化のようすを読み取ることができる。	一次関数の場合と比べて関数 $y=ax^2$ の値の変化のようすを理解している。

について理解し、考えたり、判断したりするなどの基となる知識として身に付けるべき達成目標である。

目標分析は、まず目標の洗い出しから始まる。目標分析の一つの例として、四つの観点を横軸に、学習事項を縦軸にとって、二次元マトリックスをつくり、マトリックスの中に、単元で考えられる目標を書き入れていく方法をとることがある。これは、その単元の目標全体に目配りをし、大切な目標を落とさず押さえるという意味で目標分析の最も基礎的な作業といえる。

表2は、中学校数学科3年：単元「関数」における目標分析表の例である。

ウ 単元の目標の精選と構造化

単元の中核目標の決定

洗い出された目標群全体の中で、何が前提目標であり、何が基礎目標、中核目標、発展目標であるか見分け、目標相互の関係を構造化することが必要である。ここでは、特に単元の重要な目標として考えられる中核目標を決定することが大切である。その手順について『教育方法の基礎（小学校版）』（文部省）に書かれている方法を基に述べる。

- ① その単元で最終的に実現されなければならない「中核目標」を目標群全体の中から選ぶ
- ② 中核目標を支える「基礎目標」を、最終的な学習の中に実現した際における相互関係を想定して構造化してみる。中核目標と必然的に関係のある目標のみに絞ることが極めて大切である
- ③ 既習学習の中で、中核目標に向かって学習を進めていく上で不可欠であり、土台となるものを、「前提目標」として位置付ける
- ④ この単元で必ずしも達成しなければならない目標ではないが、できれば何とかそこまで深化・発展させたいというものがあれば「発展目標」として設定する

以上のような方法で設定されてきた単元の目標の文末表現は、「……ことを理解させる」などの「……させる」という文末表現から、「……できるようにする」「……関心をもつようにする」などの「……ようにする」の表現

や「……できる」などの文末表現にすることが望ましい。それは、子供が主体的に単元の目標の実現を図るために教師が支援するという意図や、目標実現の状況を大事にするという意図を表す考えからである。

図9は、p.70の中学校数学科：単元「関数」で洗い出された目標を、精選し構造化した目標構造図の例である。

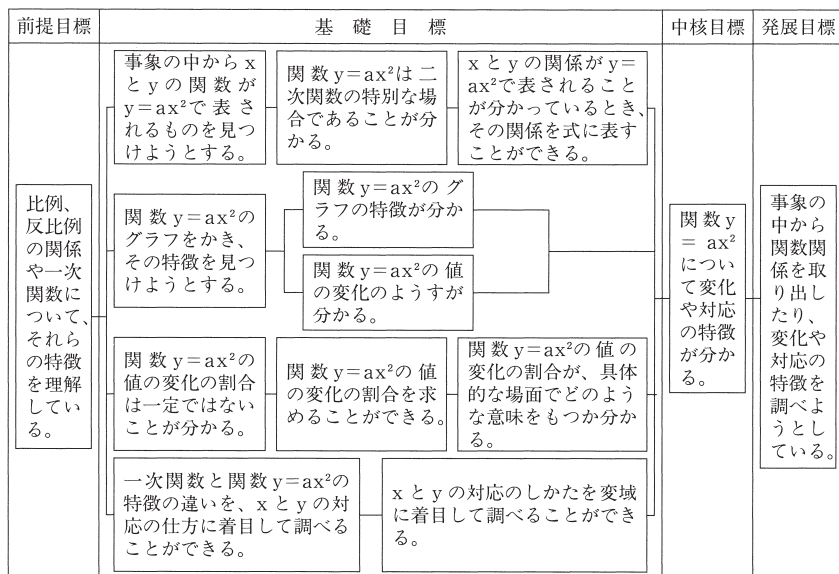


図9 目標構造図

エ 評価規準の設定

目標に即し観点ごとに設定する

学習指導に当たっては、単元の目標に即し、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」などの観点ごとに単元の評価規準を設定することが必要である。

中学校数学科3年：単元「関数」の目標と評価規準の例を示す。

目標

関数 $y=ax^2$ の変化や対応の特徴を理解し、関数についての理解を深めることができる。

- 具体的な事象の中から $y = ax^2$ で表される関数関係を見だし、それらの間の関係を表、グラフ、式に表して、一次関数と比べながらその特徴を調べようとしている。 (関心・意欲・態度)
- 一次関数と比べながら、関数 $y = ax^2$ の特徴を表、グラフ、式、変化の割合からとらえることができる。 (数学的な考え方)
- $y = ax^2$ で表される関数関係を表、グラフ、式に表したり、変化の割合を求めたりすることができる。 (表現・処理)
- 関数 $y = ax^2$ の特徴や変化の割合の意味を理解している。 (知識・理解)

さらに、授業展開に際して、学習活動を支援するためには、指導計画に評価項目や評価方法を評価計画として設定し位置付けることが必要である。

○ 「評価場面」「評価項目」の設定

設定された単元の評価規準を、指導展開のどこで評価するのか、それにふさわしい「評価場面」を設定する。また、「評価項目」は、指導内容に即し、設定した「評価場面」で、どのような行動特徴を取り上げるかを明確にし、設定する

○ 評価方法の設定

子供一人一人の伸びようとしているよさや可能性を把握するために、教師の観察、子供の発言、ノート、作品の分析や子供の自己評価など多様な方法を工夫し、評価方法を設定する

(4) 単元の指導計画の作成

教師による指導の アウトライン

単元の指導計画は、目指す資質や能力を育成していくために、どのような教材を用いてどのような課題を、どのような活動を通して追究、解決していくのかという教師による指導のアウトラインである。

指導計画の作成に当たっては、次の点に留意することが大切である。

- 研究の内容や方法の中で示された基本的構想を踏まえて、学習過程、主な学習活動、評価計画などを視点に作成する
- 指導目標、指導内容、子供の実態を基に、具体的な指導方法を考える

教材をどうするのか、どのような活動をどのように取り入れるのか、指導形態の工夫、個別指導の在り方、時間数の配分などを明らかにすることが必要である

- 子供の興味・関心などを積極的に生かすことや、子供たちの学習活動に応じた弾力的な展開ができるようにすることが大切である。そのために、指導計画に、評価項目や評価方法などの評価計画を取り入れておくことが必要である

表3は、小学校社会科4年：単元「多々良の大地をひらく」の指導計画の例である。

表3 単元「多々良の大地をひらく」の指導計画

過程	主な学習活動とねらい	形態	時間	学習への支援	評価項目		
事象に触れる	○自分にとって多々良沼や松林はどんな所か話し合い、自分たちに必要な憩いの場所であることに気付く。 ○50年程前の多々良沼と松林の様子をお年寄りから聞き、豊かな自然が残り生活する上で大切な場であったことに気付く。	全	2	・多々良沼や松林の写真などを提示し、多々良沼や松林のよさがイメージできるようにする。 ・自分たちとお年寄りの多々良沼や松林の使い方を比較し、多々良沼や松林の役割の変化に気付けるようにする。	多々良沼や松林は地域の人々にとって大切な場所であり、その一帯に残る開発の足跡に気付いている。	見通し a	
	多々良沼や松林は今私たちの暮らしにどのように役立っているのだろうか						
	○多々良沼や松林一帯を観察し、人々の開発による土地の様子の変化に気付く。			・人々の開発の跡が見られるところに観察の重点を置き、例えば「これは何に使っているのか」というような言葉を投げかけ、その場所の役割に目が向くようにする。			
	○観察をして気付いたことや疑問に思ったことなどについて発表し合い、多々良沼や松林一	全		・付箋紙と白地図を用意し、どこでどんな事実があるのかを把握できるようにする。 ・疑問が見つからないときは、発表内容をもとに、理由や	発表内容から疑問を見だし、調べたいことが見つかったら		

課題をもつ	帯の様子を知るとともに、調べたいことを考える。		2	時期を問いかけ、開発の事実に目が向くようにする。	
	○前時に考えた「調べたいこと」について話し合い、多々良沼や松林一帯の開発の理由やその時の様子、その場所の役割や仕組みを調べようとする意欲をもつとともに、各自が学習課題をもつ。	全		<ul style="list-style-type: none">一つの予想に対して違う考えを引き出したり明治時代の多々良沼周辺の地図を提示したりして、疑問点をその場所と人々の生活と結び付きに絞っていきようにする。	前時の疑問を深め、これから調べようことを明確にもっている。
多々良沼や松林一帯の様子を調べてみよう					
事実を知る	○自分やグループの学習課題について、聞き取りや観察・資料などから調べることができる。	課 グ	4	<ul style="list-style-type: none">調べ方の手引きを準備し、聞き取りや観察の仕方などの調べ方が身に付くようにする。調べるための資料が乏しいため、グループごとに適切な調べ方や問い合わせ先を紹介する。	自分の課題やグループの課題について、観察・聞き取り・資料の読み取りなどをして調べている。
	○自分やグループの学習課題について調べた結果を話し合い、多々良沼や松林一帯は人々によって開発され、暮らしに役立ってきたことや、今も開発が続いていることを知る。	全		<ul style="list-style-type: none">必要に応じて補助資料などを提示しながら、教師が補足説明をする。事象が結び付くように、同じ時代の事象に着目するよう助言し、多々良沼や松林一帯の概要をとらえることができるようにする。	多々良沼や松林一帯の土地の様子の変化をとらえている。
	○当時の人々が多々良沼や松林一帯をどのように活用していたのか話し合い、昔から多々良沼と松林が人々の暮らしを支えていたことに気付くと	全		<ul style="list-style-type: none">前時の課題を時代ごとに取り上げ、多くの考えを引き出しながら予想を絞り込み、さらに追究しようという意欲を高めていくようにする。新たな課題をどのように調べればよいか問いかけ、地域に詳しい方に話を聞くと	多々良沼や松林が当時の人々の暮らしに必要な場所であることに気付き、詳しく調べようとしている。

事実の意味がわかる	ともに、さらに調べようとする意欲をもつ。			よいことに目が向くようにする。		
	○大谷休泊に詳しい郷土史家や多々良沼土地改良区の関係者の話を聞き、それぞれの時代に、先人が、いろいろな努力や工夫を積み重ねて自分たちの住む地域を開発し、暮らしを豊かにしてきたことがわかる。	全	4	<ul style="list-style-type: none"> ・大谷休泊については、その人柄や地域社会に対する考え方などを中心に話していただき、地域社会の発展に尽くした生き方を感じ取れるようにする。 ・多々良沼土地改良区の活動については、当時の人々の願いをどう実現したのかを中心に話していただき、よりよい地域社会づくりにかけた熱意を感じ取れるようにする。 ・大谷休泊ゆかりの場所や多々良沼の干拓の様子の写真などを準備しておき、必要に応じて提示する。 	それぞれの時代における多々良沼や松林の使い方がわかるとともに、地域の人々の願いの実現へ向けた先人の努力や工夫をとらえ、先人の生き方に共感している。	見通しb
	○多々良沼や松林一帯の現在の開発についての発表を聞き、現在の開発が心に潤いを与えるものに変化していることを知るとともに、多々良沼や松林に対する地域の人々の願いを調べる計画を立てる。	全 個		<ul style="list-style-type: none"> ・多々良沼や松林などの役割の変化に気付くことができるように、昔と現在の開発の目的や人々の暮らしを対比して考えるよう助言する。 ・聞き取りについての調べ方の手引きやワークシートを準備し、抵抗なく聞き取りをしながら調べ方が身に付くようにする。 	多々良沼や松林の役割が人々の生活にゆとりをもたらすものに変化していることがわかり、これからの多々良沼や松林に対する人々の願いを調べようとしている。	
新たな課題をもつ	地域の人々の願いを聞いてみよう					
	○地域の人々のよりよい多々良沼や松林への思いや願いを調べ、だれもが快適な生活環境を望んでいるが、便利さを求めすぎた自分たちの暮らし	全 個	1	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの思いや願いと比較するよう投げかけ、自分たちとの共通点に目が向くようにする。 ・食料生産が課題だった時代と今の問題を対比して考えるよう助言する。 ・問題の一例を取り上げ、問 	人々の願いは生活と結び付いた切実なものであり、地域の人々も自分たちも同じようによりよい地域社会を	見通しa

	が一因でごみ処理や水質汚染などの問題も抱えていることがわかる。			題をつくりだしているのは自分たちの生活であることに目が向くようにする。	願っていることがわかって	↓	
みんなの願いを実現するにはどうすればよいのだろう わたしたちにできることはないだろうか							↑
課題の解決を考える	○地域の人々の願いを取り入れた多々良沼や松林の活用について考え、自分でもよりよい地域社会づくりに貢献できることに気付く。	全	1	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の過去の学習を振り返ったり「昔の人ならどうするか」という投げかけをしたりして、自分たちが地域社会づくりの担い手であることに気付くことができるようにする。 ・「自分たちでできることがあるか」問いかけて、自分自身の生活を振り返るよう助言し、自分の生活に改善すべき点が多いことに気付くことができるようにする。 	自分でできることがわかり、実践しようとする気持ちをもっている。	見通し c	
	地域の人々に自分たちの考えを伝えよう						
課題解決の考えを深める	○地域の人々や自分たちの願いを実現するために、多々良沼や松林一帯を具体的にどのようにすればよいか話し合い、グループでパンフレットをつくる。	全 課 グ	4	<ul style="list-style-type: none"> ・パンフレット作成の手引きを準備し、作り方について説明する。 ・どのような場所にしたいか発表し合い、それをもとに、考え方の近い友達とグループをつくるようにする。 ・多々良沼周辺の白地図を準備しておく。 ・一人一人の発想を大切にしていこう助言し、グループの考えに特徴がでるようにする。 ・パンフレットを冊子にまとめ、学習でお世話になった方々や保護者などに配布し、後日、意見や感想をいただけるように依頼する。 	よりよい地域社会づくりを自分なりに考え、パンフレットにまとめている。	見通し d	
	○パンフレットに対する返事を読んで、自分たちもよりよい地域社会づくりに参加しているこ	課 グ 全		<ul style="list-style-type: none"> ・返事の中から自分たちの考えに対する励ましや賛成、アドバイスなどを整理し、地域の人々の期待を感じることができるようにする。 	自分たちにもよりよい地域社会づくりが期待されていることがわか		

	と感じ、自分たちの考えに自信をもつ。		・行政の立場から市役所公園緑地課の方に、地域住民の代表として地域づくりに積極的に取り組み、これまでの学習でお世話になった方においでいただき、意見を聞くことができるようにする。	り、進んで地域社会づくりにかかわろうとする。	↓
--	--------------------	--	---	------------------------	---

注：形態における全は全体 課グは課題別グループ 個は個人

(5) 本時案の作成

ア 本時の目標の設定

本時の目標は、単元の目標や指導計画を基本にして設定されるものである。しかし、本時での興味・関心や既習事項にかかわる子供の実態等を十分配慮して決定することが必要である。

本時の目標は、達成目標の形として表現することが比較的多いが、向上目標、体験目標についても挙げる必要がある。その際、態度や価値観、思考力などの目標は、子供が主体的に学習している姿を想定し、設定する。

目標の表し方の例を挙げると、次のようになる。

○ 達成目標としての表し方

「～という活動を通して、～することができる。」

○ 向上目標・体験目標としての表し方

「～ようにする。」

「～課題意識を高めることができる。」

イ 授業仮説の設定

検証のための授業実践では、仮説の検証が目的である。そのためには、研究仮説を踏まえ、授業実践において研究としての手だてをさらに具体化する必要がある。また、その研究仮説に即して投入した手だてにより、どのように子供が変容したかをとらえる必要がある。この授業実践における具体化された研究仮説を授業仮説と呼んでいる。

授業仮説は、一般的に次のことに留意して設定することが必要である。

- 単元や一単位時間の学習過程のどこに位置付くのか
- 場、活動や支援などとして手だてが、具体化しているか
- 子供の反応、変容などが予想できるまで具体化されているか

次に示すのは、小学校社会科3・4年：研究主題「地域社会の一員としての自覚を促す社会科指導の工夫―出会いの活動を取り入れて―」の「事実の意味がわかる」過程の研究仮説bを、検証に当たる授業実践：単元「多々良の大地をひらく」（p.74～78指導計画参照）で設定した授業仮説の例である。

— 研究仮説 —

- b 地域社会で活躍している人や過去に地域社会の発展に貢献した人の行動や考えに出会う活動を行えば、その人々の努力や工夫に気づき、生き方に地域社会とのつながりを感じるだろう。

— 授業仮説 —

事実の意味がわかる過程で、郷土史家や多々良沼土地改良区の関係者の話を聞き、多々良沼や松林一帯の開発や活用にかかわった人々の行動や考えに出会う活動を行えば、人の生き方に地域社会とのつながりを感じるだろう。

ウ 本時の学習の展開

本時の学習の展開は、教科の特質や単元の構想を踏まえ、学習過程を、指導内容、学習活動、子供の反応、支援や指導上の留意点、時間、評価の観点などの項を設けて作成する。

また、授業研究を進める上では、仮説の検証内容や検証方法などを位置付けることが必要である。その場合、学習活動や評価の観点の項などに位置付けることが一般的である。

次ページ表4は、子供の学習活動を主体とした展開の書式例である。

表 4 本時の展開の書式（例）

学習過程	学習活動	支 援	時間	評価の観点
○学習過程の位置付けを書く。	○学習活動を子供の立場で記述する。 ○研究の手だてに関するところは、線で囲むなどして研究の特徴を明確にしたり、別に設けたりすることもある。	○子供の主体的な学習活動が目標の実現に向かうよう、支援することを記述する。 ○研究の手だてにかかわる部分も記述する。 ○支援の表し方は、「…して～できるようにする」「…により（興味）をもてるようにする」などとする。	10分	○ねらいに即して評価の観点ごとに評価項目や評価方法などを記述する。 ○授業仮説の検証方法についても明確に位置付ける。

エ 学習指導案の作成

(ア) 学習指導案作成の意義

学習指導案は、指導する学級の子供が目標を達成できるようにするために、教材や、活動場所、学習形態などをどのように組み合わせ、どのような活動をもどのような順序で行うか、また、教師はどのような指導・支援を行うかなどの設計書である。

(イ) 学習指導案の形式

学習指導案の形式は、学校の課題や授業改善の方向など重点の置き方により異なってくるが、それぞれの学校で創意工夫することが大切である。次に示すのはその一例である。

○○科学学習指導案	
	指導者 ○○○○ ○年○組 教室
I 単元名	
II 単元の考察	
<p>単元の考察として、記述すべき視点は次に示すが、研究の内容を単元でどのように具体化したかが分かるように記述することが大切である。一般的には、次のような項目である。</p>	
○子供の実態	

本単元に関する子供の实態を、関心・意欲・態度、思考・判断、技能・表現、知識・理解の面から考察する。子供のよさをどのように伸ばすかの考察や、研究の視点とした子供の实態を明確にすることが大切である。

○教材観

本単元を学習するまでに、子供が身に付けてきた資質や能力などの実態から、子供のよさを伸ばすために本単元で構想した教材や活動の価値、それを通して培うことのできる資質や能力について明らかにする。

○系統観

本単元までに学習してきた指導内容とのかかわりについての考察と、今後どのような学習をしていくかについて述べる。

○指導観（指導方針）

子供の实態や教材の系統などを踏まえ、目標を達成するための指導や支援のための手だてを記述する。また、研究の手だてとして考えた指導方法の工夫等についても述べる。

III 目標と評価規準

p.69～73に示してある「目標分析と評価規準の設定」を参照

IV 指導計画

p.73～78に示してある「単元の指導計画の作成」を参照

V 授業仮説

p.78～79に示してある「授業仮説の設定」を参照

指導案の位置付けとしては、研究の内容により本時の学習の展開に位置付ける場合と、単元の指導計画に位置付ける場合などがある。

VI 本時の学習

本時のねらい、準備、展開など記述する。

(ウ) 学習指導案の改善

学習指導案ができあがった段階で、その学習指導案で子供のよさを生かした授業が展開できるかどうか検討してみる必要がある。それは、教師側の論理のみでつくられがちな学習指導案を、子供の側に立ったものにしていこうとするものである。その方法の一つとして、机上授業がある。

机上授業は、発問構成・授業構成などの吟味のために、教師役が教授活動（発問、指示、指名など）を行い、子供役の教師が子供の行動を想像しながら行動や発言を行うことである。

このような机上授業を通して、学習指導案を修正・改善することが可能と

なる。

4 授業実施と授業記録

(1) 授業記録の意義

ありのままの事実
を記録する

授業は、子供たちが目標を達成していこうとする場であり、授業研究を進める上では、研究を検証するための場となる。したがって、授業記録は、研究を検証するための授業がどのように展開され、子供の発言や活動、教師の実際の指導があったかなど、ありのままの事実を記録することに意義がある。

そして、授業仮説の検証に必要な事項を落とさないよう、できるだけ客観的に記録する必要がある。

(2) 授業記録の方法

授業記録の方法にはいくつかあるが、逐語記録、抽出した子供（抽出児）の行動の記録、ビデオやテープレコードによる記録について述べる。

ア 逐語記録

これは、授業者の発問やそれに対する子供の応答内容や状況を、授業の展開のプロセスに沿って記録していくものである。

表5は、展開時の記録様式を「時間」「教師の発言・動作（板書資料）」「子供の発言（行動・反応等）」「気付いたこと」の四つの項目に分けて記録

表5 逐語記録（例）

時間	教師の発言・動作 (板書資料)	子供の発言 (行動・反応等)	気付いたこと
— — — — 5分	1 みんなの希望した挑戦したいコースを作ってみました。 (四つのコース図を黒板に提示する) 2 どのコースに挑戦したいか。また、その理由も教えてください。	(歓声がわき起こる) (早く挑戦したい様子を見せる) C ₁ 坂道のコースは、転がると勢いがつき、おもしろそうだから挑戦したい。	動機付けを図る上で、提示するコースの吟味が大事である。

した例である。教師と子供のかかわりが読み取れるように、行動・反応等を（ ）で表したり、発言に番号を付けたりしておくといよい。このほかに、抽出児を取り出したものなど、記録のポイントをどこに置くかによって、様式を工夫する。

記録をとる位置としては、教師の活動と子供の活動がよく観察でき聞き取ることができる場所を選ぶことが大切である。後で述べるビデオやテープレコードによる記録は、逐語記録を作成する際の、補助手段として利用できる。

イ 抽出児の行動の記録

抽出児の学習のプロセスにおける変容の姿を基に仮説の可否を問うことは、授業研究を行う上で有効な方法の一つである。抽出児の行動の記録をとる際には、目指す資質や能力の育成が期待できる子供や、集団全体の傾向を象徴する子供を選ぶこと、その変容の過程を比較することができるよう子供を複数選ぶことも大切である。観察者は、抽出児の言動を記録する。言動で読み取れないものは、簡単な質問により変容をとらえる方法もある。表6は、抽出児の行動の様子を記録した例である。学習活動と全体の反応、抽出児の反応を比較しながら授業記録をとることが大切である。

表6 抽出児に視点を当てた記録（例）

過程	学習活動	全体の反応	N児の反応
課題を把握する	○紹介された技をVTRで見て、自分が挑戦してみたい技を試して決める。	○あの技、かっこいいな。 ○あの技はしっかりとできるようになると、きれいだわ。 ○（VTRを食い入るように見ている）	○「開脚前転ができるようになりたいな。」 ○「頑張れば、できるかな？」 ○（意欲的な態度を示す）

ウ ビデオやテープレコードによる記録

ビデオは、文字では表現することができない身振りや雰囲気、授業で見落としていた子供の表情など、子供や教師の言動を動的・連続的に、ありのままに記録でき、再生することができる。また、授業中の教師の指示・発問・

動作などの記録を客観的に見ることができるので、自らの授業スタイルを見直すことができるなどのよきがある。

テープレコーダは発問や発言、また、そのニュアンスなど逐語記録では書き表せなかったことを記録でき、再生できるので記録の補完的な役割を果たせるものである。

5 授業評価と研究結果の処理

(1) 授業評価の意義

手だての有効性を
確かめる

授業は、明確な目標をもった計画的な営みである。

しかも、授業を構成している要素は、極めて多く、かつ、複雑である。その授業を改善・充実していくためには、子供に変容をどのように促し、どのような資質や能力を育てることができたのかを的確にとらえ、評価する必要がある。

授業仮説を設定して行う授業の評価は、授業記録で収集した資料を基に、投入した手だてにより、目指す資質や能力が身に付いたかどうかとらえ、授業仮説の有効性を確かめるために行うのである。

授業評価にかかわる資料の収集・分析は、計画的・組織的に行うことが大切である。それは、研究主題や研究仮説を多面的な視点から評価する必要があるからである。

計画を立てる際には、どのような方法で資料を収集したらよいか、収集した資料を生かすためにどのような方法で分析したらよいか検討する。そして、研究主題や研究仮説にあった授業分析が徐々に焦点化できるようにするために、吟味の

第一次の授業評価（授業記録のまとめ）

- 授業者の授業に対する反省点や問題点のまとめ
- 観察者の記録のまとめ
- 学習者のデータのまとめ

第二次の授業評価（データの分析）

- 観察者の記録の分析（ビデオ記録、テープレコーダの記録、逐語記録等）
- 中心データと周辺データの関連付け
- 問題点の洗い出しと原因追究

第三次の授業評価（結果のまとめ）

- 研究仮説の解明された点、残された課題等についてのまとめ

図10 授業評価の手順（例）

時間を十分に確保した計画を立てることが大切である。

(2) 授業評価から授業改善へ

多様な視点からの
総合的な評価

授業評価は、授業をよりよいものへ改善していくための一つのステップにほかならない。したがって、授業評価した結果を基に、授業設計や実施段階へフィードバックし、実際に授業の在り方に何らかの改善の手が加えられて初めて、本来の意味をもつものになるのである。

授業評価を授業改善につなげていく場合、次の二つが考えられる。一つは、単元レベルの一連の授業に対して、直接的な形成的評価として機能させる場合である。もう一つは、授業者の個人的傾向を明らかにして、その授業者の指導・学習計画や授業過程の基本的な在り方を改善しようとする場合である。学校において共同で行う授業研究では、後者の立場を目的にした授業評価を進めることが一般的である。

このように授業評価を進める際に、その前提として、多様な授業評価の技法のそれぞれがもつ特徴を把握し、だれが、どのような技法を用いて評価するかという評価の枠組みをもつことが大切である。多様な視点から、評価者を換えて評価し、その結果を重ね合わせて判断することが重視されるわけである。表7は、授業評価の主な機能と主な評価技法を示したものである。

表7 授業評価の主な機能と主な評価技法

評価技法	自由記述法	評定尺度法	S D 法	録音・ビデオによる鏡映の利用	観察チェックリスト法	コミュニケーション分析法〔録音・ビデオ〕
授業評価の機能						
当該単元の授業改善	授業者 学習者	授業者 学習者	授業者 学習者	授業者	――	――
当該単元を超えた授業改善〔その授業者の授業一般を改善するために〕	授業者 学習者 観察者	授業者 学習者 観察者	授業者 学習者 観察者	授業者	観察者	(授業者・観察者)

(『教育評価 (第2版)』梶田叙一より)

表中の当該単元の授業改善は、単元レベルの一連の授業に対して、直接的な形成的評価として機能する場合であり、当該単元を超えた授業改善は、その

授業者の指導・学習計画や授業過程の基本的な在り方を改善しようとする場合である。この表からも、様々な技法を総合的に用いることの必要性が理解できる。特に、授業評価に当たっては、観察者だけでなく、授業者自身、学習者自身も含めて総合的に行うことにより、より確かな評価を行うことが大切であることが分かる。

(3) 授業評価の技法

子供の変容をとら
える様々な技法

授業評価は、子供の変容を通して目標が達成できたか判断することである。したがって、授業仮説の内容や目標に即した子供の変容がとらえられる評価の技法を選ぶことが必要である。

評価技法のうち、授業評価に活用できるいくつかの方法について紹介する。

ア 自由記述法

自由記述法は、授業を見て気付いたことをカードに自由に記述し、それを整理して授業の問題点を見付けていく方法である。

この技法は、まず、参観者がカードに感じたことを自由に書き込んでいく。その際、気を付けることは、各カードに授業の分節の番号を入れ、記述する内容は、必ず1枚1項目だけにしておくことである。一分節の中で、カードは何枚でも記入可能であり、記入する視点も授業者の行動面、学習者の活動面、準備された教材・教具の効果面、学級の学習環境面など、どのようなことであってもかまわない。記入したカードを、授業研究会等の前に提出し、それを一覧表のような形に整理して提示する。その表を見ながら授業の問題点を見付け、それを改善していくためにどのようにしたらよいか話し合うようにする。

イ 評定尺度法

評価項目を、前もって作っておき、尺度を与えて設定するもので、観察者が授業者や学習者に対して行うときに用いる。定量的な処理がしやすく、短時間で結果が出せるという利点がある。このほかに、授業者の自己評価、授業者と観察者が共同で授業評価するときにも活用できる。

	よい	ややよい	ふつう	ややわるい	わるい
〈授業者について〉					
1 課題の内容は適切であるか	5	4	3	2	1
2 発問の内容は適切であるか	5	4	3	2	1
3 発問の時期は適切であるか	5	4	3	2	1
4 板書の内容は適切であるか	5	4	3	2	1
5 板書は整理されているか	5	4	3	2	1
6 説明の内容は適切であるか	5	4	3	2	1
〈学習者について〉					
1 説明や意見を聞いているか	5	4	3	2	1
2 課題に積極的に取り組んでいるか	5	4	3	2	1
〈授業全体として〉					
1 指導過程は適切であるか	5	4	3	2	1
2 理解は深まってきているか	5	4	3	2	1

ウ SD法

SD法は、概念の情緒的意味をとらえるための測定法で、意味差判別法といわれる。概念のイメージを両極性の形容詞に対する連想の強さで評定させ、因子分析するのである。

教育ではこれを、イメージの測定法として活用することがある。梶田叡一の『教育評価（第2版）』によれば、授業評価において、授業者自身が授業の自己評価をするために、SD法を用いて授業イメージ調査を行い、客観的な性格をもつ資料を得るとある。

	非常に	かなり	やや	ふつう	やや	かなり	非常に
楽しい							楽しくない
仲がよい							仲が悪い
明るい							くらい
自分から進んでする							自分から進んでしない
おちついた							そわそわした
まとまっている							まとまっていない
規則やきまりを守る							規則やきまりを守らない
協力的							非協力的
けじめのある							だらしない

図12 SD法質問紙「私のクラス」

（「沼田市教育研究所研究紀要第36集」より）

例えば、学級の雰囲気について子供がもつイメージを図12のようなSD法質問紙を用いて測定する。この場合、各選択肢を左から+3、+2、+1、……、-3と得点化し、データ処理する。学級全体の平均をその学級のプロフィールとして表し、分析する。学級の雰囲気について子供がもつイメージは、その得られた曲線から把握できる。また、ただ単に平均だけに着目することなく、その分散の度合いから学級の雰囲気の変化を予測することもできる。

このように、SD法を用いたイメージの測定結果から、学習者が全体としてどのようなイメージを得たのかを見取り、授業者の描くイメージと比べて自己評価するのである。

(4) 研究結果の処理

研究結果の処理は、授業記録から研究の手だての投入時における学習活動の事実を取り出し整理することである。この処理を基に、研究の手だての有効性を判断する段階へと進んでいくため、大切な役割をもっている。

自ら学ぶ意欲や自ら考え、判断し、表現するなどの資質や能力の育成を目指す授業研究において、子供の成長をとらえるには、その資質や能力の育成状況に視点を当てて変容を探ることが大切である。そこで「どのような子供」が、「どのような手だて」で、「どのように変容」したかを、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」などの観点からとらえることになる。その場合、それぞれの観点を独立しているものとしてとらえるのではなく、それぞれの相互関連を図ってとらえる必要がある。

(5) 研究結果の考察方法

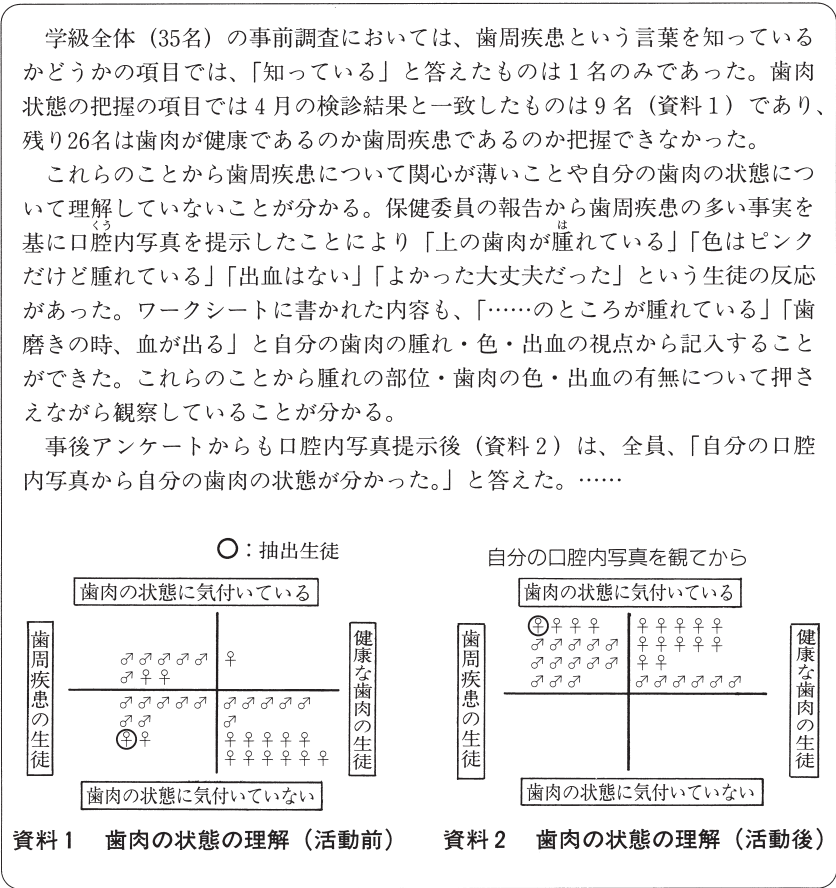
子供の変容を質的・量的に考察する

授業実践を検証の場として行う授業研究の場合は、授業仮説の検証を基に、研究結果を考察する。授業仮説には、すでに述べたように、子供の成長への願い、対象の分野・領域、具体的な手だてが盛り込まれているので、それらに照らしながら、子供が望ましい姿に変容したかどうかを把握したあと、把握した事実が手だてのどのような働きによってもたらされたのかを考察する。

抽出児の変容の事実を基に、手だての有効性を考察するという質的なもの

ばかりでなく、研究の手だてによって、学級の子供全体がどのくらい変容したかという量的な考察も行うよう心掛けたい。

次に示すのは、研究主題：「健康な生活を送ろうとする意欲を育てる保健指導—歯肉に関する教材を取り入れた歯周疾患の指導を通して—」（p.236実践例12参照）において、子供の変容を抽出児と学級全体から研究結果の考察としてまとめた例である。



6 研究のまとめ

一般的に、研究のまとめは、次のような手順で行うことが多い。

- ① 目指す子供の育成のために、どのような指導方法の改善をしてきたかを振り返る
- ② 検証のための授業実践でとらえられた事実と授業評価、研究結果の処理によって分かったことを整理する
- ③ 子供の変容に照らして、何が追究できて、何が未解決の問題として残されたかという、研究の成果と課題を明らかにする（p.159実践例1参照）

参考文献

- | | | |
|------------------|------------|-------------|
| 『授業技術講座 基礎技術』 | 東 洋・中島章夫 | ぎょうせい（1988） |
| 『教育方法の基礎（小学校版）』 | | 文部省（1991） |
| 『小学校校内研修進め方事典』 | 西村文男編 | 教育出版（1990） |
| 『中学校研究授業の進め方・見方』 | 男沢 一 | 文教書院（1991） |
| 『新しい授業づくり形成的評価』 | 梶田叡一 | 東京書籍（1990） |
| 『教育評価（第2版）』 | 梶田叡一 | 有斐閣（1992） |
| 『総論 評価と評価規準』 | 熱海則夫、高岡浩二他 | 国土社（1992） |
| 『観点別学習状況の評価基準表』 | 北尾倫彦編 | 図書文化（1993） |
| 『教師の意思決定と授業研究』 | 吉崎静夫 | ぎょうせい（1991） |
| 『子どもと教育授業研究入門』 | 稲垣忠彦、佐藤学 | 岩波書店（1996） |

第2節 教材開発研究

I 教材開発の意義と視点

1 教材開発の意義

心を豊かにしてい
く学習活動を成り
立たせるため

学校においては、教育目標の達成を目指し授業の改善・充実を図るため、常に教材研究を行い、より適切な教材を吟味して精選することが必要である。

このとき、次の①～③のような場合には、教材開発が必要になる。①子供の学力のより発展的な充足を期待する場合、②学習内容を理解するための補強が必要な場合、③身近な地域の自然、社会などについて学習する場合などである。こうした場合、学習のねらいを達成するためには、子供や地域の実態を踏まえ十分に吟味された教材が必要となる。ここに、教材開発の意義がある。

ところで、教材とは、子供が、人間、自然、社会、文化などのよさにかわりながら、自分のよさや可能性を生かし、それを高め、心を豊かにしていく学習活動を成り立たせるものである。言い換えれば、各教科の単元等の目標を実現するための学習活動を成り立たせるためのもの、すなわち、子供一人一人が学習の対象として意識し、進んでかわり、そこから自分の課題や実現したいことを見付け、自ら学んでいくための、教育的にみて価値のある素材であるといえる。このように教材というものを学習する子供の立場に立って幅広く柔軟にとらえることによって、子供の学習活動がより豊かになり、教材開発の意義も一層深くなる。

したがって、実践的研究としての教材開発研究は、開発したい教材を授業のねらいや子供の実態、活用の観点等から吟味し（教材解釈）、教師の創意を働かせて自作または従来のを改良し（教材の制作）、開発した教材の有効性を授業実践を通して検証し、その結果を考察すること（評価）である。

2 教材開発の視点

このような考え方に立って、教材開発を進めるためには、次のような視点が重要である。

視点1

子供が主体的な学習活動を展開できるようにするために、一人一人が思いを寄せてそのよさに積極的にかかわり、自ら考え判断し表現できるようにすることが大切であり、問題解決的な学習活動や体験的な学習活動ができる教材を開発する。

視点2

子供が自ら基礎・基本を身に付けることができるようにするために、一人一人の学習活動を成り立たせるとともに、その関心・意欲、思考などが広がるようにすることが大切であり、複数の教材を用意するなど、子供の多様な実態に応じた教材、すなわち、個に応じられる教材を開発する。

視点3

学校教育と地域社会における生活との関連を図り、子供の問題意識や思考などが深まり広がるように、子供の生活を基盤にした学習活動を重視することが大切であり、地域の人間、自然、社会、文化などの素材を生かした教材を開発する。

II 教材の特性と教材開発研究上の留意点

子供は、学校において様々な事物・現象と直接あるいは間接的に出会い、様々な道具や記号（シンボル）を通して学習を進める。ここでは、『教育方法の基礎（中学校版）』（文部省）にならい、教材を次のような3種に大別して、それらの特性と教材開発研究における留意点について述べる。

1 直接経験を促す教材

「生きた」知識を獲得するため

直接経験を促す教材は、子供が現実の世界で実際にかかわり、文化や社会、自然環境に直接働きかけ、吟

味し、探索して、そこから「生きた」知識を獲得することを目指す教材である。知識の真実性は、直接経験を通して実感されるものであり、未知なる世界に対する自主的な探求心を育てるためには、身近な生活に密着した知識やそれを利用している文化に、子供が自ら、直接「触れる」ことが不可欠である。

—— 直接経験を促す教材の例 ——

- コメを作るとか、ミソを作るといような、いわゆる栽培学習で利用される教材
- 動物や植物、あるいは土などに触れたり、公共施設を見学したりするなどができる教材
- 社会や文化の実践活動に参加し、現実の社会の人々と直接交流をもつような機会を作りだすことができる教材

(留意点)

- ・ 直接経験を促す教材として用いる素材は、学校向け、教室向け、子供向けなどと作り替えたものではなく、子供が自然、文化、社会の中できかわっている、正に「本物」の事物・現象であることが大切である。

2 道具による経験を促す教材

直接見えないものを道具で見る

道具による経験を促す教材は、自分自身の身体機能を拡大・延長する道具を使い、直接触れることのできないものをその道具で触れ、直接操作できないものをその道具で操作し、直接見えないものを道具で見ることによって知識を獲得することを目指す教材である。このとき、道具の操作者は子供であるため、何のどこをどのように見る（触れる）かは、子供が自己決定できるようにすることが大切である。したがって、子供が道具を使いこなせるようになるための学習が必要である。

ここでの教材は、道具による観察や操作の対象となる社会や自然の実在物（経験教材）と、その観察や操作の道具そのもの（道具的教材）の組合せとして構成されている。

— 道具による経験を促す教材の例 —

- 望遠鏡で「星の運動」を観察する場合は、「星の運動」が経験教材であり、望遠鏡がその道具的教材となる。

(留意点)

- ・ 道具の原理や仕組みがある程度分かるようにすることが大切である。
- ・ 道具を通して探索する対象は、あくまで自然、文化、社会の中に存在する「実物」とする。

3 シンボル操作による経験を促す教材

シンボルとメディアとの組合せ

シンボル操作による経験を促す教材は、文字、特定の意味が社会的・文化的に規定されている記号、モデル、図、映像などのシンボルとこれを表示し伝達する手段としての物理的媒体（メディア）との組合せによる教材である。この教材を活用するためには、道具の操作をする場合と同様に、子供がシンボルを使いこなせるようになるための学習が必要である。

— シンボル操作による経験を促す教材の例 —

- シミュレーション教材

シミュレーションは、コンピュータのグラフィック機能を有効に使い、動的で視覚的に理解しやすい画像を画面に提示するため、概念形成を助け、法則やモデルの理解を図るために有効である。

(『コンピュータの学校教育利用』芦葉浪久より)

例えば、物体の運動を対象とする教材では、従来は、「実験」で観察する以外には、その「動き方」を詳細に分析したり変化させたり、見る側の視点を移動させることなど、全く不可能であった。ところが、コンピュータを利用すれば、実験をしなくてもそれらの「動き」に対し、特定の側面だけを抽出して変化させたり、時間軸を自由に変えて表示（瞬間的な動きをゆっくりと再現することや、数日間、あるいは数年の変化をも瞬時の変化として再現することなど）させたりすることができる。

- 教材のパッケージ化

これからは、一つのテーマを様々な観点から追究できるようにするために、様々なメディアを組み合わせる活用する、いわば教材をパッケージ化する方

向に進むようになるであろう。パッケージ化された教材は、課題解決のために必要なソフトウェア、ビデオ、ゲーム、ワークシートや資料などを一つにまとめ、子供はそれらを自由に使い、相互に関連付けながら様々な学習経験をもって、学習目標を達成できるようにしたものである。

(留意点)

- ・ シンボルの規則や使用技能の習熟に追われて、シンボルを使用する本来の目的が達成されないということがないようにする。
- ・ シンボルの使用が現実世界から遊離して架空の疑似世界を構成し、子供をその世界の中に閉じ込めてしまわないよう、他者とのかかわりや文化的な活動との関連を明らかにしていくようにする。

ここでは、教材を以上のような3種に大別してその特性を述べたが、実際の教材の中ではこれらの要素は互いに分かち難く結び付いている。すなわち、「道具による経験」は「直接経験」を含んでいるし、「シンボル操作による経験」は、「道具による経験」も「直接経験」も含んでいる。そこで、学習内容と子供の発達段階を考慮し、いずれかの要素を強調してその特性を生かした教材を開発することが重要になる。

教材開発研究に取り組むために

○ 日ごろの意識と積極的な態度

研究には本来何らかの意味での新しさが必要であるが、教材開発研究では特にその要素が強い。そして新しいものを生み出すには、「子供の関心・意欲を高め、主体的な学習を成り立たせるため」という目的意識をしっかりとつことが必要である。その気持ちが強ければ教材開発の要求水準も高くなり、よりよいものに発展することができるからである。この意識を支える具体的な態度には次のようなものが挙げられる。

- ・ 日ごろから問題意識をもち続け、子供のつまずきや理解しにくい学習内容などから教材開発の課題をとらえる
- ・ 研究報告書や教育専門誌などから積極的に新しい情報を収集する
- ・ 教材開発に役立ちそうな手法、道具、材料などに常に関心をもつ
- ・ 子供や教師の反応を素直に受け止め、絶えず工夫や改良に努める

○ 先進的な教材の開発

新しく教材として活用される素材は、地域の自然、文化など従来からあるも

のを新しい視点からとらえ直して構成したもの、あるいは、技術の進歩や社会の変化に伴い新しく身の回りに登場してくるものが多い。特に後者のような場合、例えば、コンピュータを利用した教材がそうであるように、いずれ学校教育で広く利用されるようになると考えられるものについては、先進的に研究を進めることも必要である。

III 教材開発研究の手順

一般に開発研究は、研究成果の実用化や普及を目指しており、研究課題の明確化に始まり、構想・計画、研究・開発、試行・改良というような手順を経て、開発したものを実用化し、さらに広く普及するまでを一連の過程とするものである。教材開発研究の場合も同様である。まず、今日的な教育課題や自らの課題の中から教材開発を通してその解決を図ろうとするものを見だし、子供や地域の実態を踏まえて十分に吟味・検討する。それとともに、その課題に関する研究の現状を文献調査などにより把握して、研究課題をより明確にする。その上で、一般的には図1のような流れに沿って進められる。

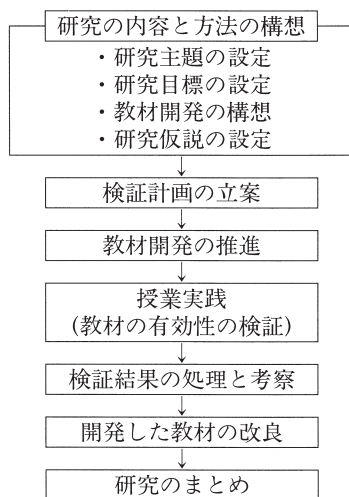


図1 教材開発研究の手順

1 研究の内容と方法の構想

(1) 研究主題の設定

教材の価値の吟味

課題の解決を目指して、これから進めようとする研究の目的、内容、方法を吟味して研究主題を設定する。

ここでは、取り上げる単元等において、開発しようとする教材の価値を吟味

することが大切である。また、研究主題の表現は、簡潔明瞭^{りよう}になるようにする。

次に、中学校外国語の研究主題の例を示す。(p.195実践例6 参照)

—— 研究主題の例 ——
英語による主体的な表現活動を促す指導の工夫
ープレゼンテーション支援教材の開発とその活用を通してー

本研究主題は、生徒の英語による主体的な表現活動を促すために、生徒一人一人がコンピュータによる文字、音声、画像等のマルチメディア機能を使って表現活動をするためのプレゼンテーション支援教材の開発を目指して設定されたものである。

なお、研究主題の表記は、上記に示したほかに「～を～する～の研究とその教材化」や「～を活用した～教材の開発」などが一般的である。

(2) 研究目標の設定

研究目標は、取り上げる単元等において、何のために、どのような教材を開発し、その教材の有効性を検証するのかということを明示したものである。前述した中学校外国語の研究の例では、次のように研究目標を設定した。

—— 研究目標の例 ——
生徒一人一人の主体的な表現活動を促すために、マルチメディア機能を用いたプレゼンテーション支援教材を開発し、授業実践を通して、その教材の有効性を検証する。

(3) 教材開発の構想

どのような教材を開発するか

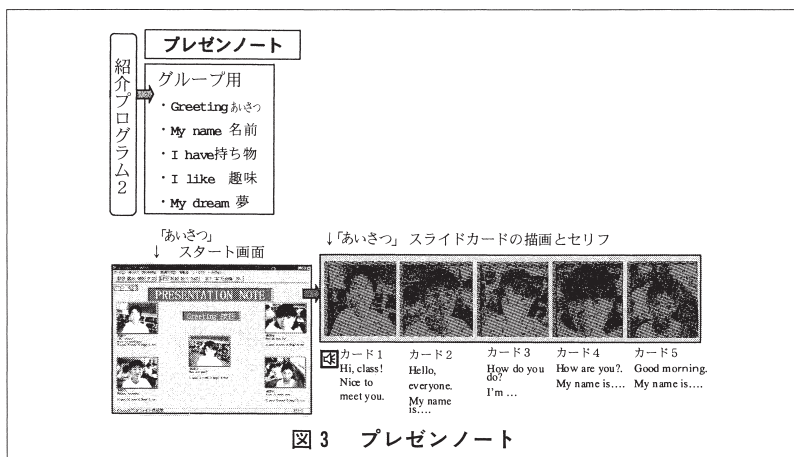
取り上げる単元等において、教育的価値を内包する素材を発掘し、どのように教材化できるか吟味する。

それとともに、どのような教材を開発するのかを明らかにする。

前述の例では、次に示すような教材を開発した。

—— 開発した教材の概要 ——
1 紹介プログラム1、2 (マイノート1、プレゼンノート)
導入用として作成したマイノート1 (個人用) と、プレゼンノート (グループ用) には、それぞれ五つのプレゼンテーション紹介プログラムがあり、ともにスタート及びカード1～5までの6画面から構成されている。

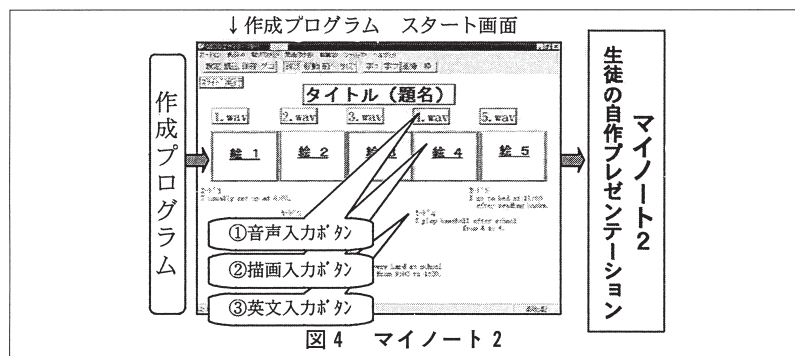
スタート画面でスライド実行ボタンを押すと、カード1から5へと自動的に画像が替わり、それぞれの画像に合わせたセリフの音声聞こえてくる。また、スタート画面上で、すべてのカードの描画、音声の記録・再生、文字入力及び編集ができるようにボタンを配置してあるので、生徒はそれらを使ってモデル音声を聞いたり、自分でセリフを考えて録音したり、文字入力をしたりすることで簡単にプレゼンテーションを行うことができる。



2 作成プログラム（マイノート2）

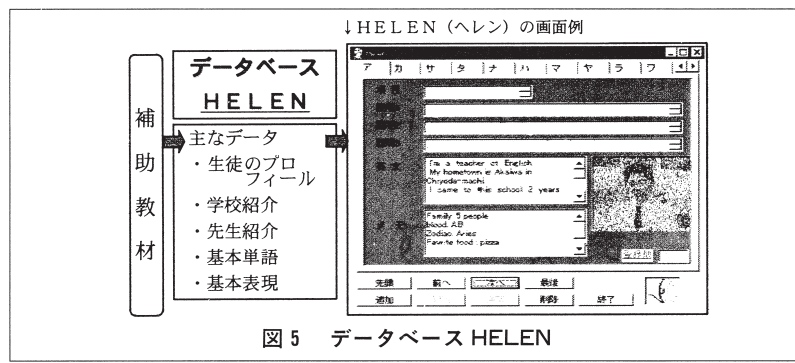
作成プログラムは、プレゼンテーション作成支援教材の基本的な画面レイアウトと作成・編集及び実行機能を組み込んだ基本フォーマットである。これを

使って、前述のマイノート1（図2）やプレゼンノート（図3）を作成した。
また、この作成プログラムは、生徒がプレゼンテーション資料を自作する際の
教材プログラムにもなっている（マイノート2）。



3 補助教材（データベース HELEN）

データベース HELEN は、単語や基本文の意味とその使い方を文字、音声、画像等の資料でまとめたカード型データベースである。五十音順によるカードの検索や編集・追加の機能により単なる調べ学習だけではなく、新たにデータを追加したり、発音・発話練習をしたりすることができる。また、生徒の文章、スピーチ、絵、写真等をコピー・貼り付けをすることでデータを増やすこともできる。生徒が自分で主体的に調べ、学習できるようになっており、生徒自身の手によるデータベース作りも可能である。



(4) 研究仮説の設定

開発した教材を、取り上げた単元等において、このように用いれば、このような効果が得られるだろうという教材の有効性についての研究仮説を設定

する。

前述の例では、次のような研究仮説を設定した。

研究仮説の例

プレゼンテーション支援教材を開発し、英語による表現活動の指導で、次のような見通しをもって活用すれば、生徒は主体的な表現活動に取り組むようになるであろう。

- 1 紹介プログラム 2（プレゼンノート）を活用して、グループで選択した課題についてのプレゼンテーションカードを作成すれば、生徒一人一人が英語による表現活動への興味・関心を持ち、意欲が増すであろう。
- 2 作成プログラム（マイノート 2）と補助教材（H E L E N）を文字、音声、画像入力に活用して、生徒一人一人がプレゼンテーションカードを作成すれば、言いたいことや伝えたいことが見つかり、それらを分かりやすく工夫し、発表しようとするであろう。

2 検証計画の立案

検証の観点、検証の方法等の具体化

開発した教材の有効性を確認するために、検証の観点、検証の方法、処理と解釈の方法を具体化していく。

中学校理科「観察から惑星の公転軌道を求める学習指導の工夫」(p.180実践例 4 参照) では、開発した教材を活用することにより、生徒が惑星の空間的な位置関係や公転の様子に気が付き、太陽系の広がりや奥行きについて推察することに有効であるかを授業実践を通して明らかにするために、表 1 のような検証計画を立案した。

表 1 検証計画（例）

検証の観点	検証の方法	処理・解釈
○ 惑星の空間的な位置関係や公転の様子に気付くことができる。 ○ 太陽系の広がりや奥行きについて推察することができる。	・事前のアンケート ・事後のアンケート ・ワークシート ・授業中の発言	○ 事前・事後のアンケート結果を数量的にとらえ、分析していく。 ○ どの程度有効だったかをアンケートやワークシート等により判断する。

3 教材開発の推進

常に子供の学習場面を想定する

教材開発の目標を具体化し、活用したい素材についての研究や道具等の製作、それらの教材化について、一連の推進計画（内容、方法、手順、日程など）を立案し、研究を進める。このとき、常に子供の学習場面を想定し、どのように用いればどのように役立つかを吟味する必要がある。

4 授業実践（教材の有効性の検証）

授業実践を通して、開発した教材の有効性を検証する。言い換えれば、子供の変容がその教材に基づいて促されたかどうかを実証的に検証することである。なお、因果関係が得られないものについては、短時間に、あるいは短絡的に結論を急がず、継続的に研究を続けることが大切である。

5 検証結果の処理と考察

子供の変容の事実を基に、開発した教材の有効性を判断し、考察する。
実践例 4 中学校理科の例では、次のように教材の有効性を判断した。

検証結果の処理と考察の例

- 自分で観察したことを基に作図することで、それぞれの惑星までの距離の違いや、惑星が間隔をあけて太陽のまわりを公転していることを容易に理解することができた。
- 観察や作図などの学習を通して、惑星の見かけの形の違いは、惑星に太陽の光が当たる向きが違うということ、それは地球から惑星までの距離が違うことを意味していることに気付くことができた。
- 多くの生徒はコンピュータの操作は初めてであったが、マウスとテンキーだけの簡単な操作によって正確に距離を求めることができた。
- 作図を通して金星は内惑星、火星は外惑星ということに気付くことができた。
- ほぼ全員の生徒が火星と金星までの距離の違いやそれぞれの公転軌道を求め、太陽系の広がりや奥行きを見いだすことができた。

以上のような生徒の変容の事実から、本教材は、生徒が惑星の空間的な位置関係や公転の様子に気づき、太陽系の広がりや奥行きについて推察するために

有効であると判断した。

6 開発した教材の改良

実践によって明らかになった課題に基づき、開発した教材をよりよいものにするために改良を加えることがある。

7 研究のまとめ

開発した教材の有効性だけでなく、その限界についても客観的に評価し、従来に比べて改善された点及び残された課題を明確にし、今後の研究の方向性を展望することが大切である。

また、研究報告書にまとめるときには、教材開発の方法及び活用の方法に十分なページを割り当てる必要がある。なぜならば、具体的な記述がなければ第三者による確認や検証が難しく、活用や発展も望めないからである。

参考文献

- | | |
|--------------------------|-------------------|
| 『教育方法の基礎（小学校版）』 | 文部省（1991） |
| 『教育方法の基礎（中学校版）』 | 文部省（1991） |
| 『教材開発の理論と実際』 | |
| 福岡教育大学教育実践研究指導センター授業研究会編 | 溪水社（1991） |
| 『身近な素材をどう教材化するか』 | 岩内弘昌 東洋館出版社（1988） |
| 『コンピュータの学校教育利用』 | 芦葉浪久 東京書籍（1986） |

第3節 事例研究

I 事例研究の意義

事実のもつ構造等を明らかにする

事例研究は、ある一つの事実について様々な資料を収集・分析し、それを構成している因子や相互の関係などを把握することによって、事実や事象のもつ構造や特性及び一般性、普遍性を明らかにしようとするものである。医学、心理学、教育など、多くの領域で用いられている。

II 教育における事例研究

問題の原因や解決・改善の手がかりを明らかにする

教育における事例研究は、教育の内容・方法の改善・充実のために、ある特定の又は典型的な事実や事象について、多角的な観点から綿密な計画の下に必要な資料を収集・整理・記録することにより、問題の原因や解決・改善の手がかりを明らかにする個別的、具体的、実践的な研究方法である。この方法には次のような特徴がみられる。

- 学校における日常の教育活動を通して研究が進められる
- 事例は日常の教育実践における具体的な事実（事象）である
- 発達の理解と継続的・計画的実践に支えられている
- 教師と子供との教育的人間関係が基盤となる
- 教育理念に基づく教育的見地・教育的配慮をもって事例を扱う

教育における事例研究は、教育内容に関するもの、教育方法に関するもの、生徒指導に関するものなどに分けることができる。なかでも多く用いられるのは、生徒指導に関する事例研究である。そこで、ここでは主に生徒指導に関する事例研究を取り上げる。

III 事例研究の進め方

行動の背後に目を
向ける

生徒指導に関する事例研究は子供の態度・行動の改善を図るために、その子供の態度・行動の背後にある心の理解や環境にまで目を向けて進められる。その手順を例示すると図1のようになる。この流れに従って、事例研究の手順を述べる。

なお、事例研究を進める際には、資料の収集、問題の理解、指導方針、指導内容などが一貫性をもってつながるように研究を行うことが大切である。

1 問題の設定

(1) 問題の発見と対象の選定

日常の教育活動における観察から、子供の態度・行動の問題点を見つけたり、心理検査の結果から気になる特徴が分かったりすることがある。これらの問題を手がかりとして、事例研究の対象を選定する。

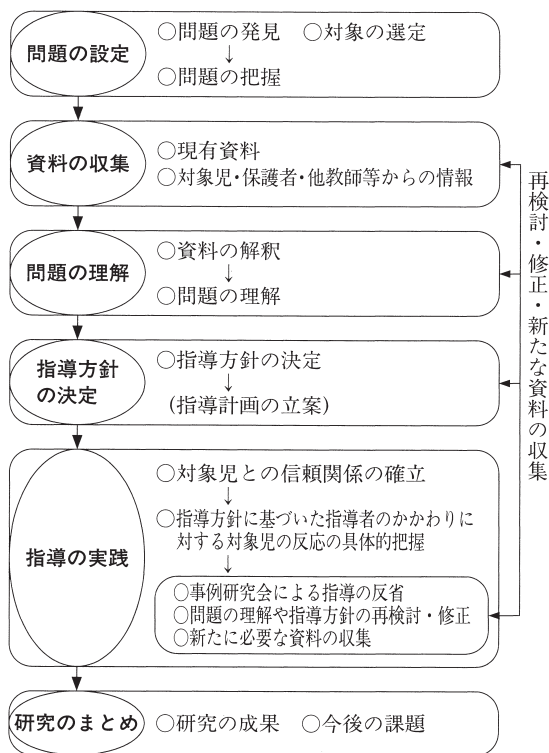


図1 事例研究の手順

対象を選定する場合は、対象と研究者との関係、問題の難易度、対象を取り巻く環境や人間関係などに十分配慮しなければならない。研究者が対象児や家庭に直接指導を行うことができない場合などは、指導者の校内における

指導上の立場（学級担任、生徒指導担当者、教育相談担当者など）を明らかにして、校内で連携を図りながら進める必要がある。問題の内容や程度、地域や家庭環境などから判断して学校での指導が難しい場合は、関係機関（教育センター、児童相談所、医療機関など）と連携を図りながら進める必要がある。

（2）問題の把握

取り上げた問題が、対象児にとって解決しなければならない問題であることを確認し、その問題となる具体的な事実を研究者（以下、指導者という）の解釈を入れないで、正確に客観的にとらえることが大切である。

問題によって把握すべき内容は異なるが、例えば、不登校傾向の場合、「欠席が多く、家にいるときは閉じこもりがちである。」という事実を以下のような観点から客観的にとらえていくのである。

①欠席のきっかけ ②欠席の始まる前のことと始まってからの対象児の様子の変化 ③休みははじめから現在までの経過と対象児の様子 ④現在の出席状況等（継続欠席か断続欠席か、曜日によって欠席に特徴があるか、遅刻・早退・欠課の有無など） ⑤現在の様子（身体症状の訴え、昼夜逆転の有無、家庭内暴力の有無、一日の生活、友達と遊べるか、教師に会えるかなど）

2 資料の収集

問題を把握した後、対象児を理解するために必要な資料を、様々な方法で収集する。収集した資料のうち、プライバシーに関するものは、保管や扱いなどに細心の注意が必要である。

（1）資料の種類

対象児を理解するための資料は様々なものがある。『生徒指導の手引（改訂版）』（文部省）では、生徒理解のための基本的な資料として次ページ表1のようなものが挙げられている。

これらを参考にしながら資料を多面的に収集し、そこから対象児の問題の理解に必要なと思われるものを選んでいく。

表 1 生徒理解のための基本的な資料(『生徒指導の手引(改訂版)』文部省より)

- 1 一般的な資料
生徒の氏名、住所、その他の資料
- 2 生育歴についての資料
ア 乳児期における病気 イ 乳児期及び幼児期におけるしつけなど
- 3 家庭環境についての資料
ア 家庭の社会的、経済的状況 イ 家族の生活態度—いわゆる円満な家庭かどうかなど
ウ 家族の教育的な関心 エ 両親の関係—和合的かどうかなど オ 本人に対する親の態度—理解的、合理的、民主的、あるいは溺愛的、過保護的、強制的、強圧的、拒否的など
カ 家族間での本人の地位—独りっ子、長子、末子など、あるいは無視されている、偏愛されているなど キ 両親のしつけの態度—厳格、不公平、感情的など ク 兄弟姉妹間の関係
ケ 同居人、祖父母などと本人との関係 コ 家族に対する本人の態度など
- 4 情緒的な問題についての資料
ア 過敏性 イ 爆発性 ウ 気分の変易性 エ 精神的な打撃を受けた経験の有無やその内容
オ 不安、反抗などの経験の有無など
- 5 習癖についての資料
ア 食事についての特異な傾向 イ 睡眠の習慣や特異傾向 ウ 性についての特異な習癖など
エ 神経症的な習癖、しかめっつら、顔面けいれん、つめをかむことなど オ 排便、排尿についての習慣や便秘、消化不良の有無など カ 言語の異常や早口、無口など キ 攻撃的、反社会的な行動の記録など
- 6 友人関係についての資料
ア 友人関係の推移や現状 イ 交友関係についての本人の特徴—わがまま、いじわる、独占的、付和雷同的など ウ 問題グループとの関係など
- 7 身体健康状況などについての資料
ア 病歴—病弱かどうかなど イ 身長、体重、栄養などの推移と特徴 ウ 精神身体的な問題の有無—消化不良、頭痛、アレルギー、ぜんそくなど エ 女子の生理の状況など
- 8 学校生活についての資料
ア 教育歴—幼稚園(保育所を含む)や小学校から現在に至るまで イ 学業成績—教科の好きさ—らい、得手不得手、学校や家庭での学習の習慣など ウ 出席状況—不規則な欠席、長期欠席、ずる休みなど エ 学校に対する態度—本人、両親、兄弟姉妹などの学校や教師に対する態度など
オ 学校生活への適応—教師や友人との関係、集団内での役割、退学・停学・訓告などの記録など
- 9 検査や調査の結果についての資料
ア 知能について イ 学力について ウ 知能と学力との関係について エ 性格、適性などについて
オ 悩みや問題行動などについて カ 興味、趣味などについて キ 将来の希望及び進路など
- 10 現在当面している困難点について
ア 身体的な困難 イ 家族関係 ウ 学校生活—学業上の問題、学校における人間関係(教師との関係を含む)など
エ 学校内外の交友関係 オ 進路の問題など

(2) 資料の収集方法

ア 現有資料の活用

学校には子供の理解に役立つ多くの資料が保存されているので、これらの資料を積極的に活用する必要がある。具体的には次のような資料がある。

指導要録、健康診断票、観察記録、面接記録、各種作品(絵、日記等の文章)、調査や検査の結果等

イ 対象児からの情報収集

観察、調査、検査、面接などにより対象児から直接得られる資料は、対象児の考えや思いなど、心の内面をとらえることができるので、対象児の立場に立った理解をするために重要である。

また、対象児の興味・関心、得意なこと等に関する資料は、信頼関係を築くための重要な糸口や具体的な指導への手がかりになることが多い。

調査や検査等を実施する場合には、対象児が安心して取り組めるように、場所や時間、信頼関係に気を配る必要がある。調査や検査の質問文は、対象児を傷つけるものにならないように、十分吟味することが大切である。実施する際、保護者への連絡・承認、結果の報告等についても配慮する。

ウ 保護者からの情報収集

保護者から、子供や家庭での様子や生育歴、保護者の教育に関する考え方などの資料を収集する。日ごろから信頼関係を築いておくことが大切である。

なお、保護者から情報を得る場合は、保護者との信頼関係を最優先し、保護者と一緒に子供の成長を図っていこうという姿勢で臨むことが大切である。生育歴等をことこまかに聞くという態度は避ける。

エ 関係する教師等からの情報収集

対象児の学級の授業に出ている教師、過去及び現在の学級担任、部活動顧問、生徒指導担当者、養護教諭など、対象児に関係する者から情報を収集する。そうすることにより、指導者の偏見や先入観による理解を避けることができる。

3 問題の理解

(1) 資料の解釈

客観的・科学的に

集められた資料が対象児の問題とどのように関連しているかについて、資料を解釈する。

資料は客観的・科学的に解釈できるよう、一般化された原則（例えば心理学の理論や技法・発達理論・他の事例研究等）などを適用しながら解釈した

り、各資料で解釈された内容を相互に関連させてみる必要がある。もし資料の間に矛盾した内容があるときは、その意味を考察し、さらに新しい資料を収集し、解釈を深めていく。

資料には、客観性・信頼

性の高いものがあるが、主観的なものや信頼性の低いものも多いので、解釈するときには注意が必要である。

図2は、「不登校児童への指導・援助」(p.219実践例9)を基に、〈生育歴〉と〈学校での様子・諸検査〉の資料についてどのように解釈を行っているか、例示したものである。

(2) 問題の理解

三つの観点からの
総合的理解

問題の原因を考える場合、問題の原因は単純ではなく、様々な要因が複雑に絡まっていることが多い。したがって、短絡的に原因と結果を結び付けることなく、様々な角度から検討する必要がある。問題の理解をする際には、収集した個々の資料から解釈したことを相互に関連させながら、「客観的理解」、「共感的理解」、「指導者の

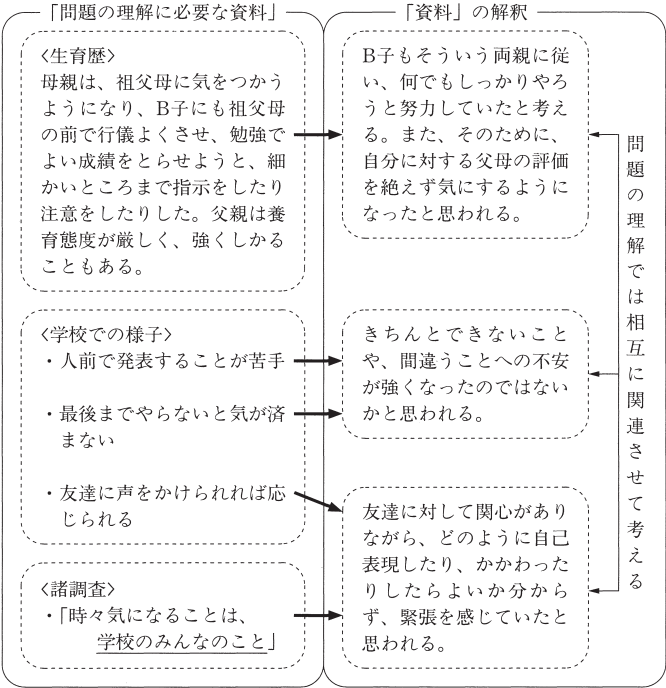


図2 資料の解釈(例)

自己理解」の三つの視点を踏まえて総合的に理解を進めていく。

例えば、様々な資料の解釈を通して、何が問題を継続させているのか、問題がどのような時や場所でだれと居るときに起こっているのか、対象児に身に付けさせたい能力や技能は何か、それはどのような一般の原則等からいえるのか（客観的理解）、そのときの対象児の置かれた状況や表情、語ったことなどから、そうせざるを得ない気持ちを指導者が推測したり理解したり（共感的理解）、それを見たり指導している時の指導者は、どのような方法で指導を行っているか、また、どのような気持ちや感情をもっているか（指導者の自己理解）、のように理解を深めていく。

ア 客観的理解

資料や一般化された原則に基づく

資料に基づかない理解は決めつけや独断に陥りやすいので、客観的に問題を理解するためには、集めた資料を基に理解を進めていくことが重要である。また、対象児の理解や問題をとらえるためには、一般化された原則等から得られる基礎的な知識も必要である。そこから得られたものを、そのまま対象児に当てはめることはできないが、対象児の性格や体質、学校や家庭の環境などと照らし合わせることで、客観的に問題の原因や要因を理解することができる。

指導をする中で新しい資料が得られれば、理解をさらに深めたりそれまでの理解について修正したりすることができる。

イ 共感的理解

対象児の立場に立つ

問題の理解は、対象児と指導者との温かい人間関係を基盤として進められることが大切である。そこで、収集したそれぞれの資料から、対象児の悩みや苦しみ、問題となる行動を起こさざるを得ない気持ちなどについて対象児の立場に立って、共感的に理解していかなければならない。共感的理解によって、指導者に受け入れられ、理解されたという安心感が対象児に生まれ、対象児の状況や心に即した適切な指導が可能となる。

ウ 指導者の自己理解

価値観等を知る

問題を理解する上で、指導者自身の価値観や人間観、教育観等が影響することは避けられない。そこで、指導

者の自己理解が大切である。これによって、問題の理解の幅が広がり、より客観的に理解を進めることができることになる。

4 指導方針の決定

対象児と環境の両面から

問題の理解によって、問題解決のためにどこに視点を当てて指導を行ったらよいかある程度目安がついた段階で、具体的にどのような指導を行うのか、方針を決定する。

校内での指導者の立場や指導技術などを基に、問題解決のために何がどの程度できるのか、他の教師の協力をどのように得たらよいのかなどを考慮して、指導方針を立てる。また、過去の指導内容とその成果を十分に検討して、指導方針を考えることも重要である。

指導には、対象児を直接指導する場合と、環境を調整する場合とがある。前者は、対象児の問題の改善を目指して、面接、学校生活（授業や休み時間等）での言葉掛け、学習指導、生活指導、家庭訪問などを通して行う。後者は、家庭や学級などへの働きかけである。

家庭環境に問題の原因があると考えられる場合には、家族への働きかけが必要である。その場合には、指導者が保護者に対して共感的にかかわりながら保護者の養育や問題に対する考えを聞き取り、保護者の立場や考えに即しながら、改善についての話合いや援助を行うことが大切である。

学級環境に問題の原因があると考えられる場合には、学級の子供が互いに協力し合い、理解し合えるように指導者が働きかけをすることが大切である。問題によっては、校内の連携の下に指導を進める必要がある。

また、指導方針に沿った指導・援助をどのような手順で行うかについて、大まかな計画を立てることもある。ただし、対象児の状態は絶えず変化しており、計画を立てても、そのまま実施するのは難しいことが多い。また、計画にとらわれるあまり、計画に当てはめた無理な指導に陥りやすいので、計画に必要な以上にとらわれない姿勢が大切である。

実践例 9 での「問題の理解」と「指導方針」との関係は、図 3 の通りであ

る。(p.221～222参照)

5 指導の実践

指導方針に基づいて、対象児や保護者、学級の児童生徒に対して、どのような状況（時間や場所など）で、どのような言葉掛けやかかわりをしたのか、それに対してどのように反応をしたのかを具体的に把握しながら指導を進める。

また、指導の経過の中で、事例

研究会などの話し合いの場を設け、他の教師から情報を得るとともに、指導に対して絶えず反省を重ね、必要に応じて新たに資料を収集したり、問題の理解や指導方針の修正や変更を行ったりすることが必要である。

指導では、次の点に留意しながら記録をすることが大切である。

- その時、その場での指導と、それに対する対象児の反応や変容を具体的にとらえたり振り返ったりできるよう、具体的に記録する
- 家庭と協力した指導や保護者への援助などは、いつ、だれが、どのような方法（家庭訪問、面接、電話等）で、どのような目的や内容で行ったか

＜対象児へのかかわり＞

「問題の理解」

周りからの評価が気になり、間違ふことやできないことに対する不安が強まっていったと考える。さらに、友達に関心があるにもかかわらず、自己表現をすることが苦手であることや、かかわり方が分からずにいることから緊張が高まったと考える。



「指導方針」

- 自分のことは自分で考えて決定し、行動する機会を多く設け、自分の考えで行動できることへの自信をもてるようにする。
- 友達がB子の家を訪問するようにし、B子が友達とのかかわりを体験することを通して、友達とのかかわり方や自己表現の方法を学んだり、緊張を和らげたりできるようにする。

＜家庭へのかかわり＞

「問題の理解」

母親の期待にこたえようとする気持ちや、母親の干渉、父親の厳しさから、完全欲求や固執性が強まったと考える。



「指導方針」

母親に対しては、母親の不安を受け止め、B子へのかかわり方や父親への対応について、母親自身の気付きや考えを支持し、B子を見守ることができるように援助する。

図3 「問題の理解」と「指導方針」の関係

を具体的に記録する

- 学級全体への指導は、いつ、どのような時間帯に、どのような指導を行ったか、そのときの児童生徒の様子を、対象児との関係が分かるように具体的に記録する。また、アンケートで意識調査をするなど、学級の児童生徒や対象児の心の変化をとらえ、それを記録していくことも必要である
- 記録する場合には、対象児や保護者に不安や誤解を与えないように目の前で記録することは控える

6 研究のまとめ

(1) 研究の成果

問題の理解、指導方針、指導の実践などの評価を行う。評価を通して研究の成果が明確となる。評価の観点は次の通りである。

ア 対象児に変容が見られたか

対象児の態度や行動、意識などが、事例研究の事前、途中、事後でどのように変わっていったかについて検討する。方法としては、観察、調査、検査、情報収集（保護者・教師・同級生から）などがある。問題が改善されたことだけに目を向けるのではなく、対象児の日常生活における小さな変化や内面の変化もつかむことが大切である。

イ 対象児の変容の要因は何であったか

対象児への指導や保護者への援助が、対象児の変容にどのように関連していったかなどについて、時間の流れに沿いながら考察する。変容がほとんど見られなかった場合、問題の理解や指導方針、指導経過でのかかわり方が対象児に適していたかどうかについて考察する。

以上のことを通して、今後の指導で生かせることや改善点について、明確にすることができる。

(2) 今後の課題

事例研究の成果を、今後の子供への援助・指導や生徒指導体制、学校経営などの中でどのように生かしていったらよいか、残された課題は何か、今後

取り組んでいく必要のあることは何か、などについて十分考察し、今後の課題を明確にする。

IV 事例研究会の開催

事例研究会は、対象児への指導をより適切に進めていくために、指導中の事例、または終了した事例の報告（事例研究レポートが準備できるとよい）を中心に、その事例の指導方針や具体的ななかかわり方と対象児の変容について、関係職員、あるいは全職員で検討するものである。

この事例研究会の事例の検討を通して次のようなことが期待できる。

- 教師が、自分自身の見方、考え方、接し方の特徴を知ることができる
- 一つの問題に対する多様な解釈、指導の在り方を知ることにより、柔軟な思考や対処ができるようになる
- 対象児を多角的にとらえることで、対象児一人一人のよさや可能性を見だし、伸ばしながら、問題解決への手がかりをつかむことができる

以上のことを通して、それぞれの教師がどのような傾向の子供の指導に適しているかが分かり、連携による効果的な指導ができる。

事例研究会が行われる場としては主に生徒指導会議（研修会）や職員会議等が考えられる。事例研究会が定期的の実施できれば、さらに効果的である。

なお、提示された事例研究レポートの管理を厳重にしたり、事例研究会後は事例研究レポートを回収したりするなど、対象児のプライバシーが厳重に守られるように配慮しなければならない。また、事例を提供した指導者が批判されたり責められたりすることのないよう、十分配慮しなければならない。

V 事例研究レポートのまとめ方

最後に事例研究レポートのまとめ方を述べる。

対象児に対して行った指導が、ある程度進んだ時点や終了した時点で、事例研究レポートをまとめる。まとめることは、今までの指導を整理し、見つめ直すことができるだけでなく、今後の指導に生かせる具体的な例として、他の教師にとって役立つものである。事例研究をまとめるときの一例を表2に示す。

表2 事例研究レポートのまとめ方の具体例

- 1 主題
 - 問題が何であるか、一目で分かるようにする
 - 手法や対象等を副主題として書いてもよい
- 2 対象
 - 匿名にする ○学年、性別を書く（例 小学校○年男子 A 男）
- 3 問題の概要
 - 問題の概要を客観的・具体的に、事実在即して書く
- 4 問題の理解に必要な資料
 - 観察や面接、検査、指導要録、健康診断など、多方面から収集した資料の中から、理解や指導に直接関係する資料を書く
- 5 問題の理解
 - 資料を総合的に検討して、問題の原因・要因などを理解する
（どうして問題が発生したか。問題を持続させているものは何か）
 - 「問題の理解に必要な資料」に基づいて理解する
- 6 指導方針
 - 「問題の理解」に基づいて指導方針を立てる
 - どのような方法で指導を進めるのかを具体的に書く
 - 必要に応じて、指導計画の項目を立てて書く
- 7 指導経過
 - 「指導方針」に基づいて指導を実践し、その内容を記述する
 - 記述の基本原則
 - ①具体性（抽象的な記述を避け、事実を具体的に書く）
 - ②継起性（時間の経過に従って記述する）
 - ③相互性（指導者と対象児との相互のやりとりと内容について具体的に記述する）
- 8 まとめと今後の課題
 - 対象児の問題行動の変容を「問題の理解」「指導方針」「指導経過」と関連付けてまとめる（対象児は変容したか、どの指導がどのように対象児の変容に影響を与えたか、問題の理解や指導方針、実践は適切であったかなど）
 - 研究の成果で一般化できること、今後の指導に生かせることを書く
 - 残された課題を記述する
- 9 参考文献

参考文献

- | | | |
|------------------------|------------|---------------|
| 『事例 発達臨床心理学事典』 | 高野清純監修 | 福村出版 (1994) |
| 『学校カウンセリング』 | 真二田 昭編著 | 金子書房 (1990) |
| 『臨床心理学大系 第14巻 教育と心理臨床』 | 安香 宏他編 | 金子書房 (1990) |
| 『心理診断と心理治療』 | 山松質文・小花和昭介 | 福村出版 (1980) |
| 『続学校教育相談』 | 小泉英二 | 学事出版 (1978) |
| 『小・中学校生徒指導ハンドブック』 | 生徒指導実務研修会編 | 第一法規出版 (1994) |
| 『生徒指導の手引 (改訂版)』 | 文部省 | 大蔵省印刷局 (1988) |

第4節 調査研究

I 調査研究の意義

教育研究における調査研究は、教育の内容や方法等を改善するために、教育の実態や動態、そこにおける諸要因の因果関係、影響や効果などを、科学的、実証的に分析し適切な提言をすることを目的として行われるものである。

辻 功の著書『教育調査法』によれば、教育調査は、問題発見的調査と仮説検証的調査に大別される。

次の図は、辻 功が川喜田二郎の「W型問題解決モデル」を基にして、二つの調査の関連を示したものである。

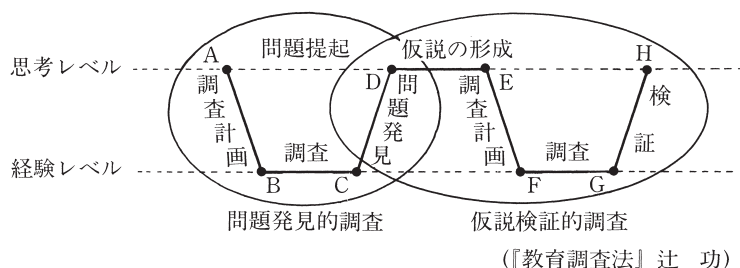


図1 問題発見的調査と仮説検証的調査との関連

表1 問題発見的調査と仮説検証的調査

問題発見的調査	先行研究がなかったり、仮説や推測を立てることが困難な場合、教育の実態や動態を明らかにしようとする調査	調査方法としては、事例的調査と統計的調査とがある
仮説検証的調査	対象の変容や、課題の背景や要因などを追究しようとする調査	

問題発見的調査と仮説検証的調査は、それぞれ固有の役割と意義をもっている。

「問題発見的調査」と「仮説検証的調査」が連結して行われるとき、実証性のある調査といえることができる。

II 調査研究の手順

1 研究目標の設定

調査で明らかにしたい内容の明確化

調査対象の分野・領域を定め、教育の実態や変容、背景や要因など、調査を通して何を明らかにしたいかを検討し、調査の目的を明確にして、調査の内容・方法を吟味する。

具体的には、次のような検討や吟味を行う。

① 教育問題の吟味

直面している様々な教育問題の中から、調べてみなくてはならないという問題を取り出し課題とする。

② 教育問題の構成要素とその関係の予想

先行研究などの事前調査や文献調査を通して、教育問題を構成する諸要素を見だし、それらの要素の間の関係を予想する。

③ 構成要素の関係をとらえる方法（技法）の吟味

構成要素とその関係を、数量的あるいは質的にとらえられるか検討し、調査方法についての見通しをもつ。

以下に示すのは、「選択教科における開設教科と指導内容・方法、評価にかかわる研究」を主題とした目標の例である。

中学校の選択教科における開設教科と、その指導内容・方法、評価についてアンケート調査することにより、選択教科の現状と課題を明らかにして、選択履修幅の拡大と内容の充実が図れるようにするための資料とする。

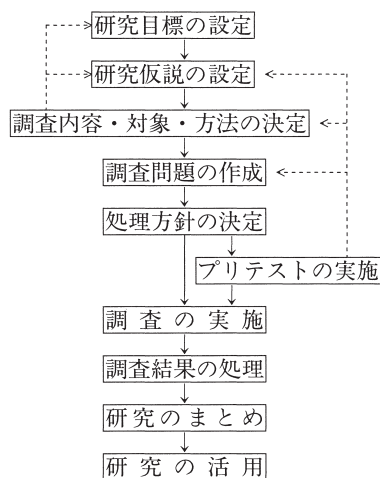


図2 調査研究の手順

2 研究仮説の設定

調査対象の背景や 要因の推察

研究仮説は、「ある教育事象はどのような要素から構成され、また、どのような要因がどのように影響を与えているか」などの予想を検証していくための調査の方向を定めていくものである。

例えば、「Aという事実が変化することにより、Bは〇〇になるだろう」、「Aという事実は、Bが〇〇のように作用しているのではないか」など、AとBとの間の相互的ないし一方向的な関係を設定し、その要素や要因を数量的あるいは質的な変数の関係から予想していくのである。このような予想を立てるためには、文献による先行研究や、これまでの教育実践を基に、自己洞察を加えることが大切である。

なお、教育の実態や問題の事実を発見しようとする問題発見的調査においては、仮説を設定しない場合がある。ただし、調査対象について、先行研究や教育実践を基にした知識があれば、ある程度の仮説や推測は立てられるはずであるので、調査の目的や方向を明確に示すためにも仮説を設定するようにしたい。

3 調査内容・対象・方法の決定

調査内容の構造化 と信頼性の得られ る方法の吟味

研究仮説を検証するためには、どのような調査内容や調査対象、調査方法にしたらいかを検討する。

調査内容は、仮説に基づき、何を明らかにしたいのか具体化、構造化する。そして、調査事項を決定する。

調査事項は、全体的な関連図式（全体構造図）として描き、調査の意義と位置付けを明確にしておく。

また、目標を達成するために、だれに対してどの程度の範囲で調査をしたらいかを吟味し、調査期間を踏まえてどの程度のデータを集めたらよいかを決定する（調査対象、期間・日程、収集量の決定）。

そして、調査方法については、調査内容・対象に基づき、調査の信頼性、妥当性、客観性や効率性の条件を満たす、観察法、面接法、質問紙法等の方法（技法）を選定し、調査時期、調査回数を決定する。

なお、教育の事実を明らかにするために、1回の調査では十分な結果が得

られない場合がある。また、調査内容によって調査を数回実施する必要が生じる。

調査を具体化するには、次のような視点をもつことも大切である。

- 対照的な集団（学校、地域）を比較し、どのような要因が目標の達成の促進条件、阻害条件になっているかを明確にする（比較調査）。
- 調査対象集団（学校、地域）が、どのような条件の下で、どのような動機によっていつから活動を開始し、今日までに至ったかその過程を追究する（過程追跡調査）。

4 調査問題の作成

調査項目の選定と形式の工夫

調査問題の作成とは、調査技法に基づき、調査事項を精選し、配列していくことである。

その際、次のことに留意して行う。

- ① 調査対象と方法に配慮した問題数や用語の吟味を行う。
- ② 調査問題の各項目が何を求めているか、各項目の間にどのような関連があるかなどを十分吟味し、目標に基づいて中核となる項目と背景や関連する項目とを精選する。
- ③ 対象者が回答しやすいことや、処理方法を考慮し、質問・回答形式を吟味して調査問題を作成する。

5 処理方針の決定

調査実施前に見通しをもつ

調査結果の処理は、研究目標と研究仮説によって方向が示される。調査問題の作成と同時に、どのように処理するか、処理方法を選定し、結果の表示の仕方（図表等）及び考察の視点を決める。

6 プリテストの実施

調査内容・方法の問題点の発見

プリテストは、調査問題が調査の意図に合う回答が得られるかどうか、調査項目やその配列、調査方法などの問題点を発見することを目的に、少人数を抽出して行うものである。

7 調査の実施

対象者が負担にならないようにする

正確な調査結果（データ）を得るため、調査対象へ調査目的、期間、回答方法を明確に伝え、対象者の負担にならないように実施する。また、目的や内容によって調査を数回に分けて実施することも考える。

8 調査結果の処理

処理方針に基づくデータ処理・分析

データの有効性を吟味し、処理方針に基づきデータの処理・分析を行う。

データの処理では、有効なデータを集計し、その結果を関連付けてねらいが明らかになるよう図表等に表していく（調査結果の表示の工夫）。分析では、既存の諸研究や資料、過去の調査結果などを活用し、結果を読み取っていく。

9 研究のまとめ

明らかになった事実と課題の提示

研究のまとめでは、分析したデータを基に事実や要因等を整理し構造化して、規則性や原則を導き出す。

その際には、「調査によって何が分かったか」の調査者自身の判断が必要である。そして、判断の結果によって新たな研究方法や内容を提言する。

10 研究の活用

指導と実践的研究に生かす

学校における調査研究は、結果を研究報告書に載せるだけでなく、指導や引き続いて行う実践的研究に生

かすようにすることが大切である。

そのためには、調査研究の結果やその意味することについての理解を深めるとともに、今後の指導の改善点を確認する必要がある。

III 統計的調査と事例的調査の方法

調査方法は、統計的方法と事例的方法の二つに大別される。

統計的調査は、対象となる教育事象を数量的に把握し統計処理によって事実や要因等を明らかにする方法であり、大規模（広範囲）な対象を、大量かつ多面的に把握する方法である。

事例的調査

表2 統計的調査と事例的調査の長短

	統計的調査	事例的調査
は、ある特定の個人（集団、事象など）を個別事例的に取り上げ、それを多様な角度から観察・分析すること	長所 1. 結果の客観性が保証されやすい 2. 全体的傾向が把握できる 3. 普遍化、一般化がしやすい 短所 1. 調査費用がかかる 2. 結果が表面的・平面的である 3. 結果が得られるまでに長い時間を要する	1. 比較的少数の対象を取り上げるので相互の関連、微妙なニュアンスも明らかにすることができる 2. 時間的な変化も追求できる 3. 研究対象の特性も公分母的形で解消されることなく、生かされる 1. 結果の普遍性、一般化の保証が得られない。常に主観的解釈ではないかとか部分的な調査ではないかという批判を受けやすい 2. 全体的傾向がわかりづらい

（『教育調査法』辻 功）

で、その特徴をつかみ、関係する要素や要因をとらえようとする方法である。

統計的調査と事例的調査とを比較すると、前者が大量のデータを多面的に分析し、後者が少数のデータを深く分析して事実や要因等を見いだそうとしたり、前者が数量的な分析、後者が非統計的な記述を主眼として問題を分析するなど、対照的な関係にある（表2）。調査研究は、このいずれかの方法で行うことが多いが、この両者の特性を生かし、互いに補完し合うことによって調査の精度が高まるといえる。

1 統計的調査の方法

調査目的と仮説が設定され、データ収集の方法として統計的な方法が選択された場合、調査は、図3で示す手順で進められる。

このうち、「調査対象範囲の決定」から「調査日程、人員等の決定」までの内容は、図2（p.117）の調査研究の手順の「調査内容・対象・方法の決定」に当たるものである。

以下、図3のA～カについて要点を述べる。

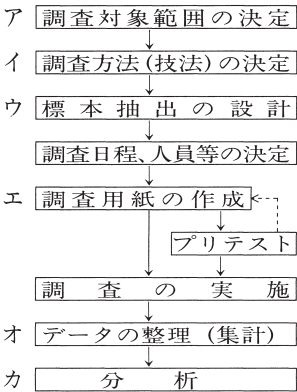


図3 統計的調査の手順

(1) 調査対象範囲の決定

全数調査と標本調査

調査対象範囲の決定は、研究目標や仮説検証のためにどのような対象を取り上げることが適切か、また、どの程度の範囲を対象に調査することによって把握可能か、の2点から検討する。

検討の結果、すべて（母集団）を調べる必要が生じる場合と、母集団から一部を抜き出して調査する場合がある。

前者が全数調査（悉皆調査）、後者が標本調査（サンプル調査）である。

調査対象範囲のとり方としては、調査の目的に適合する最大の範囲をとる最大限法、典型的な対象範囲をとる典型法、対比的な複数の範囲をとる比較法がある。

例えば、「〇〇小学校5年生の児童」という調査対象は、〇〇小学校5年生の実態をとらえる上では最大限法の全数調査であり、〇〇市の5年生の実態をとらえる上では典型法の標本調査となる。このように、調査対象は範囲のとり方の違いで対象選定の理由が異なることに留意する必要がある。

(2) 調査方法（技法）の決定

自記式と他記式質問紙調査

調査対象からデータを収集する方法としては観察法、投影技法、質問紙法がある。

以下、典型的な技法である質問紙法による調査について述べる。

表3 質問紙調査の種類と特徴

自記式（直接記入式） 質問紙調査	留置調査	被調査者に文書で質問し、文書で回答を求める ・被調査者に配布・依頼してまわり、一定の日時後に回収する ・被調査者がゆっくり時間をかけて回答できるが、本人が回答したという保証がない
	集合調査	・被調査者に一堂に集まってもらい、質問紙に記入する ・回収率が高いが、被調査者同士が意識したり、時間を気にして回答を急いでしまう
	郵送調査	・被調査者に郵送し、一定期間に返送してもらう ・広域な調査にふさわしいが、回収率が低い
他記式（間接記入式） 質問紙調査	被調査者に口頭で質問し、口頭で回答を求める	
	面接調査	・調査者が被調査者に対面し、口頭質問で回答を聴取・記入する ・細かなことも追加・補足説明でき、誤答を少なくできるが、調査者による質問の意図にズレが生じる場合がある
	電話調査	・被調査者に電話で接触し、回答を得る ・広範囲にわたる調査に適し、本人からの回答が得られるが、回答時間に制約があり、質問量も限られる

（『教育調査法』松原治郎による）

質問紙法は、調査者が、事前に用意した質問を、被調査者に口頭又は文書で質問し、回答を収集する方法で、自記式（直接記入式）質問紙調査と他記式（間接記入式）質問紙調査に大別される（表3）。

調査方法の選択に当たっては、調査目的との適合、対象者又は集団との関係、回答内容の信頼性や制約性、回収状況、調査期限や経費等を総合的に判断して行う。

(3) 標本抽出の設計

**全体を推定するサ
ンプリング**

標本抽出の設計は、標本調査（サンプル調査）の場合に行われる。

標本調査は、母集団の中から一部をサンプルとして抜き出して調べ、これで全体を推定しなければならない。このようにサンプルが全体を代表するように抽出する方法をサンプリング（標本抽出）という。したがって、サンプリングはサンプル調査に大きな影響を与えることになる。

サンプリングの手順は、次の通りである。

ア 母集団の決定

研究目標に基づき、どのような調査対象として母集団を選定したか、明確にしておかなければならない。

イ サンプル数の決定

標本調査は、母集団の一部の調査であるため、母集団全体の調査結果と必ずしも一致しない。したがって、母集団とサンプルとの差である標本（統計）誤差と、誤差の生じる危険率（サンプルの信頼度）がサンプル数を決める条件となる。

一般的に世論調査では、誤差は3%（=0.03）か5%、信頼度は95%か99%をとる。

サンプル数は、次の公式を用いて算出できる。

$$n = \frac{N}{\left(\frac{\epsilon}{\lambda}\right)^2 \frac{N-1}{0.5 \times (1-0.5)} + 1}$$

N ：母集団 ϵ ：標本誤差
信頼度95%の場合は $\lambda = 2$
99%の場合は $\lambda = 3$

例えば、ある町の小学校5年生500人を対象に、学習に関する調査を行う場合、誤差を3%、信頼度を95%とした時のサンプル数は、 $n=345$ となる。

実際の調査に当たっては、サンプル数によって調査結果にどの程度誤差が含まれるか考慮して分析を進める。

ウ サンプルング方法の決定

サンプルングの方法は、有意抽出法と無作為抽出法に大別することができる。

サンプルング方法で重要なことは、母集団を代表するサンプルをとるということである。したがって、母集団の選定を慎重に行うとともに、研究目標に応じてサンプルング方法を選定する（表 4 参照）。

表 4 サンプルングの方法

有意抽出法	調査者が何らかの意図をもってサンプルを選ぶ方法 プリテストや、対象者に多大な協力を得ようとする場合に有効 典型法：全体を代表すると思われるサンプルを集中的に調査 機縁法：知り合いをサンプルとして調査
無作為抽出法	調査者の主観を入れずにランダムにサンプルを抽出する方法 単純無作為抽出法：母集団リストの中から乱数表などを用いてランダムに選ぶ方法 系統（等間隔）抽出法：乱数表などでランダムに選んだ後、等間隔（例えば10の倍数）で選ぶ方法 多段抽出法：例えば県下の全学校から、何校かを抽出し、その学校から生徒を選ぶなど、抽出を複数行う方法 層化抽出法：特定の指標（性別、学年、年齢、地域、校種）などによって母集団を分け、この各層から抽出する方法

（『教育調査法』松原治郎による）

サンプルング方法は、母集団の構成が異質である場合に重要となり、比較的均質な母集団であれば、それほど問題とならない。実際の調査では、異質な母集団を均質な母集団としてサンプルングしてしまうことがある。調査においては、母集団の構成を吟味し、サンプルング方法を決定する必要がある。

特に、比較調査の場合には、比較対象数に留意するばかりでなく、学年、居住地などの対象者の属性を均質にしておく必要がある。

以下は、標本抽出の設計について、「小学校における指導方法の工夫・改善に関する調査」を例として示したものである。

○調査内容	小学校の低・中・高学年の、目指す授業、学習形態・活動、支援などの授業づくりに関する実態
○調査方法	郵送による質問紙調査

○調査対象

- ・母集団 県内の公立小学校教諭 5,767人
- ・サンプル数 県内の公立小学校教諭の5%を抽出 288人
- ・サンプリング方法 多段無作為抽出法



- ア 抽出校の選定 調査対象人数から調査対象校数を選定 96校
県における各地区の教諭の占める割合から、各地区の調査対象校数を決定（中部 32校、西部 28校…）
- イ 対象者の抽出 抽出した学校において、低・中・高の各学年ブロックから1名ずつ、計3名を抽出



県内小学校から地区別に抽出した計96校で、各校の低・中・高学年ごとに1名ずつ抽出した計288名が調査対象者

(4) 調査用紙の作成

調査用紙の作成は、プリテストの実施と前後して行う。その手順は、次のとおりである。

調査項目の選択→ワーディング（質問文、回答選択肢の検討・決定）→質問紙の構成とプリテスト→調査用紙の完成

ア 調査項目の選択

調査項目の構造化

調査項目は、基礎データとして必要な調査対象の属性、仮説検証に必要な生活事実や意識等を具体化してリストアップする。仮説検証に必要な項目が網羅され、しかも可能な限り調査項目を少なくするためには、項目間の関連性をとらえるための図式化を行い、項目を調査内容に基づき構造化する。

表5 調査項目の種類

基礎質問項目 (属性質問項目)	性、学年、年齢、校種、居住地など、被調査者の属性を確定する項目で、クロス集計や比較検討の目安となる	
事実質問項目	事実、経過、経験等に関する客観的事実にかかわる項目	調査項目の中心 調査内容から具体化する
意識(態度)質問項目	意見、態度、価値、感情等にかかわる項目	

(『教育調査法』松原治郎による)

調査項目は表5に示す3種類があり、調査目的に応じて焦点化する。

また、質問に回答しやすくするために、質問の流れが自然になるよう、導入質問や捨て質問などを組み入れる工夫も必要である。

イ ワーディング（質問文、回答選択肢の検討・決定）

同義に解釈できる
簡潔明瞭な文

ワーディングとは、調査用紙で用いる言葉遣いのことである。

調査用紙を構成する文書と用語は、回答結果に影響を与えるので、簡潔明瞭で、だれでも同じ意味に理解できるよう表記しなければならない。

ワーディングの主な留意点は、以下のとおりである。

（ア）質問文のワーディング

質問の意図や内容を明確にする。また、教育に関する専門用語や、集団や地域によって意味が異なる言葉は避ける。

① 一つの質問に二つ以上の次元が含まれないこと

「～についてどう思いますか」では、賛否、内容など多様な回答になる。何のどのようなことについて質問しているのかを明確にする。また、選択回答形式の場合には、選択肢に留意する。

② 文章の意味内容が二つ以上の論点を含む質問にならないこと

例えば、「子供が学習に興味を示さないのは、子供の対象へのかかわりの少なさや教師の教材提示の仕方などに原因があると思いますか」は、子供と教師の両方の原因を聞いていることになるので、どちらか一方に限定した質問にする。

③ 回答として求める事柄の時点やレベルを正確に示すこと

例えば、「あなたは普段、どのくらい勉強しますか」では、普段が日曜日や祭日を含むあいまいである。事実に関する項目は、平常の行動か特定日時の行動かのどちらを聞くのかははっきりさせる。「最近、いつも、将来、」などの語も要注意である。

また、「あなたがよく勉強する教科は何ですか」と「あなたはこの1週間でいちばん勉強した教科は何ですか」とでは、レベルが異なる。

④ 概念的ないし一般的なことを聞くのか、具体的ないし個別的・個人的に聞くのかを明確に示すこと

例えば、「あなたは、お子さんの担任に、もっと宿題を出してほしいと思いますか」と「あなたは、教師がもっと宿題を出すべきだと思いますか」は、個人的な事実と一般的な事実についての質問の違いがある。

⑤ 誘導的な表現は避けること

「あなたは～について賛成ですか」という質問では、回答の多くが「はい」

となりがちになるので、「賛成ですか、それとも反対ですか」と質問するなどして誘導質問を回避する。

(イ) 回答形式、選択肢等のワーディング

- 回答形式は、次の二つがある。

自由回答法（オープン・アンサー）：ありのままの意見が得られる

無回答や予期せぬ回答も多い

選択回答法（クローズド・アンサー）：結果を整理、分析しやすい

- 選択回答法の選択肢は、次のものがある。

2項選択法：「はい、いいえ」「ある、なし」など

評定尺度法：「よい、どちらともいえない、悪い」など

多項選択法：可能なケースを網羅し、重複や次元の異なる選択肢を設けない

回答は、単数回答、複数回答、品等法（順位づけ）がある

例えば、「あなたは、教育に関心がありますか」の質問に、「ある、どちらともいえない、ない」のような評定尺度法による選択肢を設けることがある。これは、質的な内容を量的にとらえようとするもので、選択肢によって被調査者が相互に比較できる「ものさし」を作る。これを、尺度化（尺度構成）という。

ウ 調査用紙の構成とプリテスト

自然に回答できる
ような質問の配列

調査用紙は、質問を一定の順序で配列し、全体としてまとまりを与える必要がある。

質問の配列に当たっては、被調査者に調査に対する信頼・安心感をもたせるよう、質問に自然な流れを作り出すことが大切である。

ここでの留意点は、以下の通りである。

- ・回答者が徐々に関心をもてるように配列する
- ・簡単に答えられるものから徐々に複雑な質問にする
- ・同じ形式の質問はなるべくまとめる
- ・デリケートな質問は、なるべく後の方にする
- ・前後の質問が回答に影響し合う場合は、質問を離して配列する

調査用紙案ができたなら、本調査に先立って質問文等の問題点を把握するためのプリテストを行い、修正する。

プリテストでのチェックポイントは、以下のことである。

- ・質問文、選択肢に不備はないか
- ・被調査者に誤解を与えたり、理解できないもの、回答拒否率（無回答や不

定答) の高いものや予期しない回答が出るものなどはないか

- ・ 特定の選択肢への回答が多すぎたり、逆に全く回答されないものはないか
- ・ 自由回答法による回答は質問意図に合ったものか
本調査に向けて、回答内容から選択肢を作ることもある
- ・ 調査実施上、他のトラブルはないか

エ 調査用紙の完成

あいさつ文を加え
体裁を整える

調査項目と回答形式は調査目的を達成するための根幹をなすものであるが、調査は被調査者の協力なくしては始まらない。したがって、被調査者に信頼と協力を得るため、調査の目的、主体を明記したあいさつ文を作成し体裁を整える。

調査用紙は、次のことを加えて完成させる。

- ・ 調査タイトル
- ・ 調査のお願い、あいさつ (調査の目的、主体、連絡先、秘密保持の確約等)
- ・ 記入上の注意 (調査期間等を含む)
- ・ おわりのお礼、結果処理の仕方と公表の有無 等

(5) データの整理 (集計)

コンピュータを活用
したデータ処理

データを統計的に分析するために集計する。集計は、カード等に転記して分類集計する手集計があるが、コンピュータで表計算ソフト等を用いると、度数分布、平均、クロス表などの基礎統計が簡単に作成できる。

集計の手順は、次の通りである。

① エディティング (集められたデータのチェック)

調査用紙の回収数、回収もれのチェック、記入ミス、記入もれ等を点検し、分析に使えるものと使えないものに分別する。調査用紙を識別できるようにサンプルナンバーをつける。(ナンバリング)

② コーディング (符号化)

データを類型 (分類) し、コード (符号) 化する。自由回答は、一通り目を通した上で分類し、コードを設定する。大まかな分類で集計すると途中細かな分類に変更しづらくなるので、あらかじめやや細かな分類にしておく。

③ インプット (入力)

④ 単純集計、データチェック

入力完了後データを打ち出し (リスティング)、点検する。そして、度数分布、

平均、標準偏差、最大値、最小値などの単純集計を行う。単純集計で、予想と大きく異なる結果がある場合は、入力、集計ミスがないか確かめる。

多くの統計が相対度数(%)で処理される。相対度数は全体に占める割合であるので、同じデータでも母数によって値が異なることに留意し処理する。また、「無回答」や「わからない」の回答数については、質問意図によって含めるか否かを決める。

⑤ 集計計画の策定（クロス集計等）

クロス集計等を行う際には、集計結果から何をしようとしているのかを明確にする必要がある。この目的が明確となれば、どの質問項目をどのように集計したらよいかの集計計画が策定できる。

クロス集計では、質問項目とクロスさせるもの（基礎クロス）を決め、集計結果を分析する。さらに、目的に応じて、三重クロスや質問間クロスを行う。

(6) 分析

データを全体としてとらえ一般化

統計的手法により得た結果は、集団全体の分布や差を問題として扱うのであり、個々の対象の差を問題にするのではない。したがって、分析結果を考察し、一般化するときに留意する必要がある。

例えば、「大学進学率の高いA高校の生徒の多くは、学校生活に満足している」という結果は、「大学進学率の高い高校の生徒は、学校生活の満足度が高い」とはいえないのである。

また、分析結果が、調査用紙作成の段階で予想したものと大幅に異なる場合は、調査自体や分析方法に誤りがなかったかを確かめる。誤りのないことが確かめられれば、新しい知見が得られたことになる。その際には、その背景や要因の分析を行うことが大切である。

以下は、統計的調査における調査内容、調査項目の設定と、その分析方法について、指定都市教育研究所連盟が「子ども達のみから見た教育的環境への認識」をテーマに行った調査のうち、「家族」についての意識調査を例に示す。

この調査は、全国12の都市に居住し、都市の学校で学ぶ子供たち（小学校4年、6年、中学校2年）を調査対象とし、子供たちを取り巻く「教育環境」を「人」「空間」「時間」「情報」の視点に分け、その視点から子供たちがどのような影響を受け、何を学び、どう自分の中に取り入れ、いかに自己形成しているのかをとらえようとしたものである。

このうち、「家族」についての意識調査では、次のような内容が吟味されている。

- ・「人」を、子供が成長していく中で最も直接的にかかわる環境として「子どもの成長・発達を促進させる環境」ととらえること
- ・子供に影響を与える「人」を、家族（特に親）、教師、友だちの3対象に絞り、その人との「かかわり」→「とらえ」→「深まり」のステップを通して、子供が身近な人から学ぶ意識の過程を探索すること
- ・家族（特に親）については、「かかわり」を「家族との接触」、「とらえ」を「共感対象となる親の行動」、「深まり」を「親から学ぶこと」としてとらえること

上記のような観点から、次のように調査項目が設定されている。

設問1 あなたが、家族でいちばん大切にしたいと思うことは何ですか。

- ①同じ話題についておしゃべりすること
- ②そろって食事をする
- ③「ありがとう」や「おはよう」が言い合えること
- ④家の仕事を分担し合うこと
- ⑤思ったことを自由に言い合えること
- ⑥特にな

設問2 あなたが、おうちの人の姿を見ていて、見習いたいと思うのはどんなところですか。

- ①一生懸命働いているところ
- ②家族を大切にしているところ
- ③家族を明るくふんいきにしているところ
- ④趣味やスポーツなどに打ち込んでいるところ
- ⑤地域・学校の活動に参加しているところ
- ⑥特にな

設問3 あなたが、おうちの人がしてくれることで、いちばん感謝していることは何ですか。

- ①困ったときに、相談にのってくれること
- ②いけないことをしたときにしかってくれること
- ③がんばったときに、ほめてくれること
- ④自分の考えを大切にしてくれること
- ⑤兄弟や友だちとくらべないこと
- ⑥特にな

設問4～9 略

設問10 あなたのことを、よくわかっていてくれると思う人を順にあげると、次の中ではどれになりますか。

- ①1.家族—2.友だち—3.先生
- ②1.家族—2.先生—3.友だち
- ③1.先生—2.家族—3.友だち
- ④1.先生—2.友だち—3.家族
- ⑤1.友だち—2.家族—3.先生
- ⑥1.友だち—2.先生—3.家族
- ⑦よく分かってきている人は、特にいない

「人」に関する10の調査項目は、家族（特に親）、教師、友だちの順にそれぞれ三つのステップで配列し、10番目にクロス集計の基礎資料として活用する「子どもにとってのよき理解者はだれか」を質問している。

この配列は、回答する子供たちに、「よき理解者としての家族、教師、友だち」の順位を意識せずに1～9の質問に答えさせたいこと、また、1～9の質問を回答することによって「よき理解者としての家族、教師、友だち」を考えていけるように配慮されている。

さらに、選択肢の最後は、「特にない」を設けている。これは、選択肢①～⑤を「かかわりを求めようとする傾向」ととらえるのに対して、⑥の「かかわりを求めようとししない傾向」と位置付け、分析の視点としている。

次に、単純集計とクロス集計の分析と考察について、上記の調査項目のうち、設問1を例に示す。

設問1の集計結果は、図4のように全体と学年別に帯グラフで表し、比較考察できるようにしている。

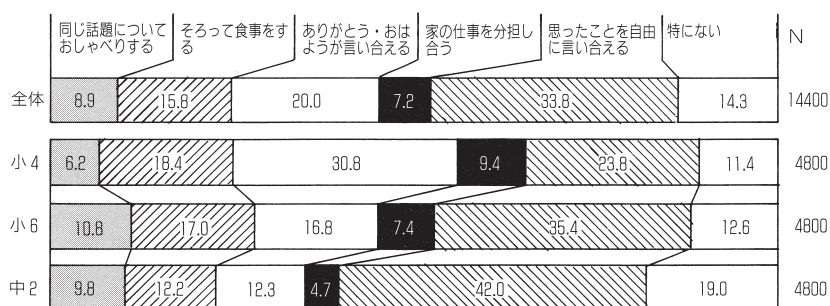


図4 「家族で一番大切にしたいこと」(設問1)
(『子どもがとらえた教育環境』指定都市教育研究所連盟編)

分析は、学年による差が顕著に現れている「ありがとうやおはようが言い合える」「思ったことを自由に言い合える」と「特にない」の選択肢に着目して行って

いる。その結果、「小6・中2に比べ、小4段階は、一つの約束事を守ることによって、家族の一員としての所属感を得ようとしており、小6以降は、会話を通してのかかわりが家族の絆を形成する上でより重要な要素となってくる」ととらえている。また、「特にない」が学年進行に伴い漸増していることを「家族離れ」の傾向としてとらえ、「家族にかかわろうとする意識が、思春期への到達結果として低下していく様子」と分析している。

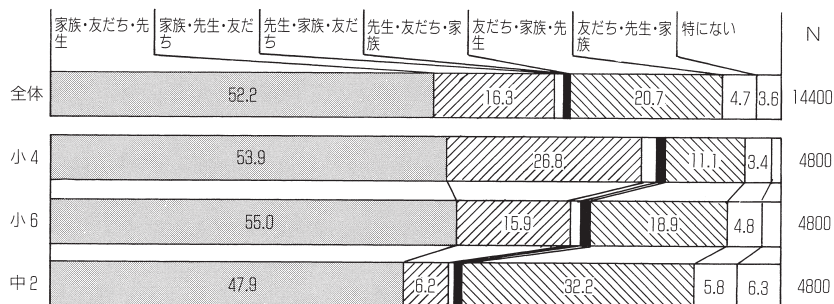


図5 「子どもにとっての『よき理解者』の順」(設問10)
(『子どもがとらえた教育環境』指定都市教育研究所連盟編)

設問10(図5)は、子供の「よき理解者」の対象として、家族、先生、友だちの順位付けの結果を示している。

その結果を、「小中学生の段階では、「よき理解者」として「家族」を第1順位にあげる子供が多いことがわかる。(略) 学年が進むにつれて、「友だち」を第1順位に選択する子供の割合が増加してくる。また、「理解してくれる人は特にない」の増加も学年変化の特徴のひとつである。」と分析している。

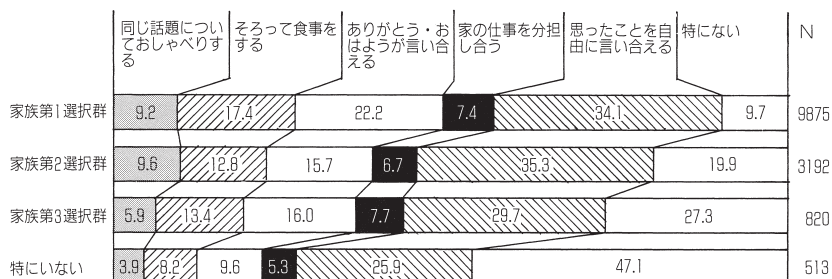


図6 設問1と設問10とのクロス集計
(『子どもがとらえた教育環境』指定都市教育研究所連盟編)

図6は、設問1と設問10とのクロス集計結果である。

設問10で、「よき理解者」として、家族を第1順位で選択した子供を「家族第1選択群」、第2順位を「家族第2選択群」、第3順位を「家族第3選択群」とグループ化して設問1とのクロス集計を行っている。

このクロス集計は、各群ごとの「家族で大切にしたいかわり内容」の意識傾向を読み取ろうとしたもので、「家族を「よき理解者」に選択する順位が低くなるほど、家族で大切なことは「特にない」、すなわち家族にかかわりを求めようとしない傾向が増加する」ことが明確にとらえられる。また、「理解者がいない」と回答した子どもは、「かわりを求めようとしない傾向が一層強まっている」ととらえている。

このように、クロス集計によって、単純集計では見えなかった事実をとらえることができるのである。ここにクロス集計を行う意味がある。

最後に、分析結果の考察は、調査研究の目的である「提言」に向かっていかなければならない。このことについて、設問1に関する考察を例に示しておく。

設問1に関する考察

子供の「家族から理解されている」という意識は、家族へのかかわりをより積極的なものにすると認められる。一方、「理解されている」という意識は、会話等のコミュニケーションなくしては生じない意識でもある。そう考えると、子供の家族へのかかわりの欲求は、家族共有時間の確保にその源を求めることができるのである。

2 事例的調査の方法

事例的調査は、特定の個人又は集団を対象に質的側面の観察や分析を行い、調査対象のもつ個性や変化の過程及びその要素や要因、さらには現象の背後にある深層構造を追究する。

以下、事例的調査における対象事例の選定、事例的調査の技法（データ収集方法）、データ処理と解釈について要点を述べる。

(1) 対象事例の選定

典型的、代表的な事例を選定

調査の目的にあった事例を選定していくことが大切である。つまり、対象事例が典型的、代表的なものであることが必要である。典型的、代表的な対象事例を選定するためには、選定基準を設定し、その基準を満たすものを選び出す。その方法は、平均的・一般的な事例から、または、特徴が際立つような特殊な事例から基準に適

したものを選ぶ二つが考えられる。

実際に事例を選定していく際には、事例の類型化を行い、類型ごとに比較が可能な平均的・一般的な（または特殊的な）事例を選ぶ。例えば、県内の小学校を調査しようとする場合、対象となる学校について分析に必要ないくつかの類型を設定し、類型ごとに小学校を選んでいく。このことは、事例の選定に当たっては、分析も視野に入れつつ、類型比較ができるようにすることが大切であることを示している。

(2) 調査の技法（データ収集方法）

自由面接法と参与観察法

データの主な収集の方法として、自由面接法と参与観察法がある。

ア 自由面接法

自由面接法は、聴き取りと呼ばれるもので、相手に応じ、また状況に応じで自由に質問していく方法である。

面接に当たっては、次のことに留意する必要がある。

- ・あらかじめ対象となる個人、または集団に関する情報を入手し、一定の知識を得ておく
- ・対象者との間に親和感、信頼感をもてるようにする
- ・自然な会話の流れの中で、必要なデータを得られるようにする
- ・調査者の客観的な立場を保持し、議論は避ける

なお、調査者が複数の場合には、聴き取りマニュアルを作成し、一貫したデータが得られるようにする必要がある。また、聴き取りマニュアルの作成は、データの信頼性、客観性の保持にもなる。

イ 参与観察法

参与観察法は、調査者が調査対象の集団に入り、その一員として振る舞いながら、データを収集する方法である。

この方法は、対象者の思考や行動を観察でき、その集団の活動を通して事実をとらえることができる。

これまでも教師が授業での観察を行い、観察結果を分析する方法を行ってきたが、これからは、子供とのかかわりを重視して、調査者自身が集団の一

員として参加し、そこでの変容に注目していくなど、この参与観察法は広く教育活動に活用していけるものとする。

(3) データ処理と解釈

ア データ処理

信頼性、客観性のあるデータの図表化

事例的調査で得られるデータは、質的なデータが多い。そこで、データ処理は、データを批判的に検討し、取捨選択する必要がある。つまり、収集したデータすべてを分析処理するのではなく、信頼性、客観性の得られるものを選んで行う必要がある。また、不正確なデータについては、補充や確認のための調査が必要となる。

面接や観察記録の分析処理は、特に信頼性と客観性の保持が重要となる。例えば、仮説検証的調査においては、設定した仮説に合わない事実を意図的に排除したり、見落とししたりすることのないようにしなければならない。

したがって、データ分析の信頼性と客観性を保持するために、調査者が問題意識を明確にもち仮説を柔軟に設定したり、複数の人がデータを分析したりすることなどが必要である。

データ分析で主観や恣意的な側面をできるだけ排除していくために、上記のようなことのほか、図表化や類型化が用いられる。

図表化には、因果関係図表、比較対照図表、展開過程図表、組織図等がある。図表化や類型化は、対象の相互関係や因果関係をとらえることができ、事例の全体的・構造的な把握に有効である。

イ データ解釈

データ解釈は、一つの結論を導くことだけを考えるのではなく、データ分析を通して複数の解釈を用意し、その中から妥当性、信頼性、客観性のあるものを導き出し、場合によって複数の解釈をする。

妥当な解釈を得るためには、(ア)ブレンストーミング (イ)K J法 (ウ)専門家や研究者からの助言 (エ)調査対象者へのフィードバック (オ)類似する調査との照合などの方法が考えられる。

参考文献

- | | | |
|----------------|--------------|---------------|
| 『教育調査法』 | 松原治郎 | 有斐閣 (1985) |
| 『教育調査法』 | 辻 功 | 誠文堂新光社 (1970) |
| 『学校のための教育研究法』 | 藤原藤祐 | ぎょうせい (1989) |
| 『子どもがとらえた教育環境』 | 指定都市教育研究所連盟編 | 東洋館出版社 (2000) |